

辺留村の記述は、「入三丁半横十六間 深六尋小舟出入 砂川流十五丁間歩渡り 川尻幅三十間」と読める。そして笠利村のは、「横二十間有入三丁二十間 深七尋ヨリ二尋小舟出入 砂川十九丁四十間 川裾幅五間歩渡」と判読できる。これらの記述は、向後他所の記述全体の比較を通して読み解く作業が必要だろう。たとえば、辺留の隣ジマである須野には、海浜の広さとともに大船のことも書かれ、「天保十一庚子自春有居船場」と新たな居船場の役割を記入する。他方で笠利が古くからの湊機能を有した筈なのに居船場とならなかったのは、確実な交通手段としての赤木名への山道が確保され、しかも充実したからだろうか。絵図を見ていると様々な問い合わせが投げかけられてくるが、向後の課題とする。

何よりも目を惹くのは、集落の位置に細かく民家が描き込まれていることだ。辺留の民家は海浜のほぼ中央に七戸程の家々が記される。その数は戸数というより、集落の規模を比較する時の目安となりそうだ。そしてなによりもその位置は、現在の須野との境界となる台地周辺と異なっていた。現在も数軒の民家の建つ海岸中央あたりがかつての集落だったことが分かる。しかし『笠利町誌』には、次のような記述がある。「辺留部落はもと辺留城の山麓にある「ブインのクボ」の辺に位置していたが、大火にあり焼失したので現在の所に移住した」という<sup>(67)</sup> 古層の位置は、更に辺留グスク東側の低地であったのが、海岸中央へそして現在地へと東へ移動してきた次第が判明する。元の地には「辺留崖遺跡」も確認される。この火災による移動も、前述してきた笠利討ちとの関連も考えることができるかもしれない。『おもうさうし』が「辺留笠利」と謳ったのも、辺留グスクを中心にふたつでひとつの共同体であったことを窺わせる空間の広がりであった。

笠利村は更に興味深く描かれている。民家群の描き込みが三箇所となっている。1箇所は「金久」と記され、十軒程の家々が海浜沿いにある。現在の3区／金久である。更に「雑木林 ミキヨ山」と書き込まれた山間から出る川筋が大きく蛇行する所に、「里」として九軒程の家がある。これは2区／里前に相当する。だが聴き取りでは、この周辺は湿地帯として語られ、民家は赤嶺台地裾にあったと語られる。蛇行する川筋はフイゴウラ／大井川である。山から流れ出た川筋が金久の海岸砂丘によって蛇行した様が分かる。後に土石流などの災害で民家が移動したことも考えられる。少なからずこの絵図は笠利村が金久と里とに川を境界に双分される構造にあったことが分かる。そして更に「當原」即ち台地が居住空間を三方から梢円状に囲む。そのトゥバルのひとつが突き出すようにあり、そこに「赤峯」として5軒の家々が描かれている。これが現在笠利中学校が建ち、里前地区の居住空間中央に迫り出すハンニエ／赤嶺である。絵図では里・金久のまとまりから少し外れるよう見える。前述の笠利討ちで論功を得た久米島の赤嶺等に関わる琉球役人たちの居住地であったかもしれない。この台地もグスク遺跡であることは前述した。

このように絵図は、古層の居住空間を教えてくれる。

また辺留グスクの位置する所は「邊留崎」とあり、海には「平瀬」とある。その台地を赤木名道が赤く描かれていることは指摘したが、道は途中で二つに分かれ、ひとつが赤木名観音堂があった赤木名グスクの遺構を有する山の傍へと新たに結び、『元禄國絵図』に書かれていた古くからの道は赤木名の「御藏」へと結んでいる。現在の外金久の嚴島神社の下辺りで、砂糖樽の蔵が建っていたと伝承される所である。笠利のオグラ機能が陸路を介して赤木名と連動していたことも考えられる。

笠利のオグラと呼ばれたウーバル／上原の石壘については前で少し触れた。その台地の海側外れに「秋葉堂アリ」とある。この神社は昭和9（1934）年に移されるまで、段丘上の外れに然程大きくなかった祠が祀られていたことが伝承される。立ち並ぶ蔵々の火の用心に火伏せの神としての秋葉堂が考えられるが、往時の人びとにとっては違っていた。そのことを教える記述が、『南島雜話』を纏めた名越左源太の『遠島日記』<sup>(68)</sup> のなかに読み出せるので、紹介しておく。

安政2（1855）年の4月22日の記述である。この日は雨だった。

朝六ツ起、五ツ時分近藤氏へ参、白尾三人笠利村の秋葉神社參詣、喜美行・宍太郎も召列申候。今日參詣の譚は、先日喜美行より、海上安全のため、此秋葉權現宮之致參詣候得ば、定て靈験有之、喜美行親にも一度、喜美行にも三度上國時々參詣、毎も海上別て順風よろしく候間、是非致參詣候様承申候ての企にて御座候。——略——<sup>(68)</sup>

島人たちの海上安全の靈験を聞いての參詣だった。島人とりわけ上国する島役人たちには、何より海上守護が祈念されていたことが分かる。因みに名越は4月10日には蒲生權現にも訪れていた。

この秋葉堂の勧請年は不明である。赤木名の秋葉神社跡には、「安永5（1776）年丙申正月」と刻銘した手水鉢があり、それ以前の建立が考えられるが、山道が結ぶ笠利も赤木名と同時期の建立が想われる。

こうして嘉永絵図は、現在の空間のありようを窺わせるように、より身近な記録となって見えてくる。絵図が現在の空間へと導くように、またその更なる過去へと遡る手立をも与えてくれるようだ。ここでは笠利集落が金久・里・赤峯という三つの居住空間から成っていたことを確認しておきたい。しかもそのありようが、空間の双方から三分へと展開していく他集落のありようとは異なり、双方する空間とは別にもうひとつの居住空間という位置どりがあったことを窺わせる。たとえば在地の共同体と、笠利討ちの論功を得た久米島の赤嶺らのような外來者の共同体である。集落区分の変容は後頁とするが、古老が語る「ハンニエモトジマ」という伝承や、その台地裾のウヤツコロという呼称は、その後の笠利集落としての成り立ちを考えさせる。

人びとが棲まう地としてある空間に、歴史は笠利討ちを繰り返した。こうしたことなども含め、人びとは現在という位置から笠利集落をどのように語るのであろうか。

## 第2節 伝承が語る豪傑と『南島雑話』

アヤマル岬に立って用岬を見渡す景觀は、大島でも数少ない絶景のひとつだ。その海岸線は夏の陽差しに白沙が輝いて眩しい。だが、大笠利集落の海岸だけが何故か砂利浜である。かつて人びとはそれを利用して、稻刈りした稲束を海岸で干したことを語る。嘉永の大島絵図を見ても、辺留崎からの海岸線は他より後退しているのが分かる。しかし、金久の家々が海岸砂丘に沿うように展開しているのを見ると、ここもかつて砂浜が広がっていた筈だ。恐らく湊機能を高め、船の出入りを可能とするために珊瑚礁を切り取ったのだろう。大正時代にも大型船寄港のためにダイナマイトで開墾されたことがあり、海岸にはその記念碑が建つ。こうした繰り返しによって次第に潮の流れが変わり、砂浜が流失したと想われる。この位置に湊の役割を求めるのも、『おもろさうし』に『辺留笠利』と謳われた時代へと遡ることが出来るかもしれない。

このアヤマル岬から用岬の見事な海岸線の両端となる用集落と須野集落には、その中央に位置する大笠利集落を舞台とした豪傑の伝承がある。

用と須野にはモジョロメと呼ぶシマ長がおり、互いにその豪力を誇っていた。双方のシマが何かにつけ争うので、二人のモジョロメは笠利の海岸で力比べをすることにした。だが勝負は決まらず、十年も繰り返された。そこで二人は争いを嫌い自殺して果てた。ともに後継者が欲しくば川上に、そうでなければ川下に埋めよと遺言した。人びとはこれ以上の無益な争いを厭い、川下に遺体を葬った。その後用モジョロメの魂は、ニヤーデン鼻で赤い火となり、須野モジョロメはアヤマル崎に青い火となった。小雨降る夜に二つの岬にその火を見ることができるという。<sup>(69)</sup>

笠利討ちが繰り返された空間であるからこそ、このシマ長の力比べとなって語られる豪傑伝承は一層興味深いものとなって存在する。この「モジョロメ」という呼称は、「おもろさうし」などに謳われる前掲の「船もどろ」とか「明けもどろ」の「もどろ」ではないか。靈力が発散する様子を表現する言葉である。「メ」は

「おめ」即ち「思い」で、敬ふ言葉が縮まったもの。つまり靈力の有る優れたお方という意味としての「モドロ・オメ」が、「モジョロメ」となったと考えられる。清らかを意味する「もちよる」という言葉もある。

このように琉球の古語で呼ばれる豪傑ということになると、前述してきた琉球から来た役人とか交易で結ぶ琉球人が考えられるが、どうだろう。伝承は二人の豪族の死を語ることで、後の平穏を語ることになる。しかも二人の魂は、赤・青の火となって岬に浮かぶ。海上の燈台のように語られるのは、海原を守護する役目を仮託したものなのかな。結果として豪傑が生まれないことを語ることになる。何らかの社会的な変動を意味するものとして語り継がれてきたのかもしれない。

二人の力比べをした笠利の海岸には、足痕の残った巨岩があったというが、工事で破壊されてしまったことを『笠利町誌』は記す。多分金久の護岸堤工事の時なのだろう。各所で聞く、岩の上でノロ神女が魚群を招き寄せたという伝承などが想起される。伝承は二人のシマ長が笠利へ来ての力比べである。笠利には二人を従える統治者がいたということなのだろうか。

その伝承の場所を見下ろすようにある辺留グスクの先端部を人びとはヒヤンゴと呼んでいる。古く金久の人びとの墓所であったことも語られる。確かに日露戦争で戦死した若者の墓や、弘化2（1845）年の蔵方目付の墓が建っている。更にそれらの外側、つまり岬の先端には箱式石棺墓を4基見出す。海を見る位置はノロ墓である可能性がある。恐らくこうした聖空間を、後に金久の人びとが墓所として利用してきた過程が考えられる。そしてこの一画だけをヒヤンゴと特定して人びとは呼んでいる。まず「ゴ」と付くからには湧水でもあるかと調べ歩いたが、辺留崎全体に見出すことはなかった。畠地となる台地上は、今も天水を集める工夫がなされる程だ。では、ヒヤンゴとはどのような意味と背景があるのだろうか。

『南島雜話』に「平安司」「平安子」と記述される豪傑のことが載っている。その調みを、前述の「ヒヤア」に因んで、「ヒヤアアンジ」と訓んでみることもできる。「平安子」はそのまま「ヒヤンゴ」とも訓めないことはない。このような解釈をひとつの可能性として、『南島雜話』の豪傑の記述をここに提示しよう。

「平安司身丈七尺五寸、力拾人に勝れたるありと云。喜界島用事あり、帰るさまに便船を請しに、船頭荷物あらば運賃を出すべしと云。平安子、私は身づからなりとて、三斗入の俵を七里の海上を肩にかたげて、船に卸さずして舟なぎさに着きければ、一札して下りさる。」<sup>(20)</sup>

喜界島との往来が、この人物と笠利との結び付きをより強く窺わせる。しかし、この豪傑振りを誇る人物も、別頁での琉球への途次大島に渡ったとする鎮西八郎為朝の記述のなかでは、その引立役となって記述されている。

それは「島童の口すさび」、つまり子守唄となってある。

大和城の御曹子や左りぬ	(訳) 大和城の御曹子は左の手で
石きやあへあきへゆぬ	石など軽々ともち上げる
平安子や石ぬきや	平安子が石などは
右ちへあきゆぬ	右手でもち上げる
子供きやあ	子供たち寄なよ
城の五曹子のいもぬな	城の御曹子が御出なさるに

平安子に勝る人物を、「御曹子は為朝なりと云伝。不詳。」<sup>(21)</sup>と、『南島雜話』は続けて記述している。

大和城は、先の大島討ちでも述べたように名瀬にある。『南島雜話』には、当時の現名瀬湾となる景観が描かれており、そこに「伊津部村大和城弁天宮の図」<sup>(22)</sup>と書き込みがある。

為朝に象徴される大和武者と、琉球の按司或いは在地の豪族ヒヤアを想わせる平安子の対比である。それはそのまま奄美における琉球と薩摩という支配者の移り変わりを言っているようにも受け取れる。この大和城の

御曹司については、別に論じているのでそれに譲る。<sup>⑤</sup>

少なからず、「平安子」「平接司」の記述が、ヒヤアや按司を連想させる。しかもそれはこのヒヤンゴという言葉にも繋がるようにも見える。大親／オホオヤから転訛したヒヤアという呼称がヒヤンゴという言葉の音にも重なるからもある。共同体の長としての意味がヒヤアにはある。安易なようだが、そのまま族長の子、共同体統治の繼承者としての意味をヒヤンゴに読むことも、ひとつの考え方としてある。改めて、それが地名となって辺留グスク台地にあることを考えれば、そこに居を構えた豪族の存在が地名となって伝承されてきたものかと考えるのも、問題提起としては許されるだろう。

モジョロメという豪傑の伝承や、地名ヒヤンゴの背後に「平安子」と記述された豪傑のことが、この笠利集落との関わりのなかに現れる。これらも、この空間が宿してきた数々の歴史を、そこに暮らし続けてきた人びとが表現したひとつと言える。

こうして人びとの伝承にモジョロメと呼ばれた二人の豪傑と出会い、「南島雑話」の記述に一人の按司の貌を想った。そして何よりこれら三人の人物たちによって繰り広げられる出来事となって物語られた記述を、「大鳥由来記」<sup>⑥</sup>として書写されたなかに読み出すことができるのである。

同書の成立年代は不明だ。文末の記述で「天保寅年（1830）」の「惣御買入」に触れているのでそれ以後だが、その文体から明治に入ってからのものかとも考えられる。内容も日本國の始まりから為朝・平家の南走を語る。その一方で具体的にノロやノロの頭となる「おはん」などにも触れ、大鳴を二分した「笠利おはん」「焼内おはん」の支配を記す。そうした琉球支配時代のこととして続けられたのがこの内容である。そしてこの一文の後には薩摩支配についての記述が続いている。ここではこの箇所を読み下し文にし、紹介しておくことにする。

—略— 笠利間切のうち用村に用小次郎、須野村に須野小次郎と申候て、大力無双の荒男二人これあり。沖縄の命にそむき候故、笠利方親方の謀をもって両人をたばかひ、いづれ両人勝負致し、勝たるものをお沖縄へ申し上げ候て、船長にせんとただし候處、無知の荒物故、両人に三日三夜昼夜を分かたず力争いたし候へども、一向に勝負相分からず。皆共に疲れ入る時分、この上は海中に入りて勝負せんと相企て候由。右に付き海に入り相争い候處、程無く共に相果て候故、今に死後迄その亡魂相残り、夜に入り候はば、用村沖に知らず一夕相燃え候と。須野村にも同時に燈し火にて又々勝負致し、夜明け迄晴雨構わず相争う体に相見え申し候。しかれども須野の火は須野にて見えず、用の火も同様にて候。—略—

沖縄に従わない用、須野の二人の豪傑に、笠利方親方の深慮となるばかりごとの展開となる。この豪傑の力比べは、結果として沖縄に従わない「益荒男」ならぬ力まかせの無知な「荒物」が、沖縄の知略の前に滅びるというものであった。笠利方親方はこの笠利の統治者を語り、二人の荒物とは琉球に順わぬ笠利討ちに敵対した豪族たちであろうか。ひとつの出来事として笠利の歴史をまとうように人びとの口の端に掛けられてあったことを、この記録は教えてくれる。

### 第3節 笠利集落の民俗・歴史地図

#### 1. 笠利間切から村そして町

奄美大島の北域となる、赤尾木地峡によって括られた南北に伸びる半島状の地形をなす地域が、笠利町である。太平洋を望む東側は、海岸に砂丘が発達し、背後に緩やかな台地を広げている。そこには農耕地としての基盤整備が進み、広大な砂糖黍畑となっている。笠利集落——笠利町との区別から大笠利と通称される——は、その東岸東北部に位置する。北端となる笠利崎（通称用岬）と、東方に喜界島を遠望するアヤマル岬とを

結ぶ大きく緩やかな弧を描く海岸線のほぼ中央となる。

藩政下での間切区分（行政区画）では、大島七間区のひとつ笠利間切は、17ヶ村を二分して笠利方と赤木名方とした。

笠利方：屋仁・佐仁・用・笠利・手花部・喜瀬・湯湾（用安）

赤木名方：邊留・須野・宇宿・萬屋・節田・平・赤尾木・芦徳・里・赤木名

隣り合う笠利と辺留とをわざわざ二方に分離している。しかも、そのありようはやや複雑な区分となってい。る。地域としてのまとまりでは、笠利方が屋仁・佐仁・用・笠利と手花部・喜瀬・用安との南北に離れた形であり、その二地域に挟まるようにして、赤木名方の里・赤木名と辺留・須野・宇宿・萬屋・節田・平の地域が位置する。そして明治41（1908）年の島嶼町村制で二方が笠利村となる時、龍郷村に編入されることになる赤尾木・芦徳が、笠利方の南城となる手花部・喜瀬・用安の更に外側に位置するという具合である。

元和9（1623）年の統治大綱『大島置目之条々』には、「一、一郡ニ用人三人つつ相定候事」という一条がある。<sup>(23)</sup>

琉球治政下の行政の長である大親役を廃止して、次位となる用人（後の與人・与人表記）を薩摩藩政下での最高位の役職とした。その用人を一郡即ち一間切に三人にするというのである。同年の『大島代官記』には、「大親役被召募、與人役ヨリ御勘定相達候様被仰渡候」<sup>(24)</sup>と、年貢勘定を與人にさせている。つまり間切を三分して、年貢管理に当たらせていたことが窺える。

前掲の家譜にも、琉球治政下での笠利大屋子・喜瀬大屋子・宇宿大屋子と、三地域の役職を見た。薩摩支配後も、それらが笠利與人・喜瀬與人・宇宿與人と役職名の変更はあるものの、地域を三分した職名が存続し、そのことが裏付けられる。

藩政下に入った当初、笠利集落に奉行所が置かれる。その奉行所を基点に、年貢石高を間切全体の均衡をとるために三分したものか。笠利と辺留を併せた地域にした場合、その耕作面積が広くなり過ぎるからか。かつて辺留笠利をひとつとする地域が、琉球王府時代に笠利討ちをするまで力を蓄えたことを嫌ったからなのか。いずれにせよ笠利間切はこの笠利を基点に辺留を分離して、その上更に三方区分がなされていた。

その石高であるが、元和年間に大島・喜界島などの検地が行われ、元和10（寛永元・1624）年に石高43,257石余が確定される。そして寛永12（1635）年に新たに寛永内検の石高が、領地高として徳川幕府に届けられる。

寛永10（1633）年には奉行が代官に代わる。その理由は賃租の収支計算が用人の上国によって行われていたのを現地で行うためである。笠利に置かれていた奉行所は、同12年に代官所となって名瀬の大熊に移っていく。

その後明暦3（1657）年から万治2（1659）年にかけて新たな検地が行われたことを、『大島代官記』は記述する。その万治2年に代官記は、「右御代、七間切横目一人ツ、被仰付候」<sup>(25)</sup>と、与人役の補佐となる横目を配置したことを記す。既に明正18（1641）年には大島代官附役が三人から五人へと増員されていた。大島支配の実務組織が検地の実施にともなって整備されていく。

寛文12（1672）年の『大島要文集』に載る「覚」<sup>(26)</sup>がある。「検地ノ時分勘定ニモ一間切二筆子毫人ツ」と、元和竿の検地で筆子を各間切に一人配置したが、万治3（1660）年の代官川越新左衛門の時、「相役中遠方罷居候故」に事務処理の不都合が多く、筆子を二人に増やし、一人分の扶持を二人で分けることを願い出していた。

この万治年間の検地をはさんで行われた横目や筆子など島役人の補充にともなう組織の整備が、一間切三方分割を二方分割へと再編した時期と重なるだろう。その結果、石高による均衡分割として前述のような区分になつたと考えられる。

笠利間切の二方区分のありようが、三方分割からの再編結果として、少し複雑な組み合わせとなった。辺留

と笠利は隣り合うシマでありながら、それぞれ異なる方に属すことになった。

そして明治2（1869）年、代官所は在番所へと改められる。同4（1871）年の廢藩置県は、同7年になって奄美でも施行され、在番所の代官以下の薩摩役人が引き上げる。代わって大島支庁が名瀬に置かれ、島役人の与人・横目・掟・功才が各地域の行政事務を引き継ぐ。そして同8年これら旧役職に替えて、戸長・副戸町・筆生が置かれた。

この時も笠利は笠利方と赤木名方に分けられていた。しかしその分割方法は藩政下と異なったものだった。

笠利方：手花部・喜瀬・赤尾木・芦徳・用安・平・節田・和野

赤木名方：里・中金久・外金久・川内（川上）・屋仁・佐仁・用・笠利・辺留・須野・宇宿・万屋

その分割方法は、赤木名（里・中金久・外金久）を基点にしたものとなる。赤木名方が時計廻りに、笠利方が逆の左廻りに、西岸に位置する赤木名からは反対側になる東岸の場所を境界として二分された。この二分は地勢に準拠して分割するやり方で、合理的な区画となっている。

明治22（1889）年の市町村制は島嶼を枠外に置き、同41（1908）年に島嶼町村制が施行される。この時笠利方と赤木名方の二方が統一され、笠利村となる。この時赤尾木、芦徳が龍郷村に編入され、現在の地勢的なまとまりとなる。そして笠利村内は8区に区画され、笠利区は笠利・用、辺留は須野と須野区になる。

その後大正9（1920）年島嶼町村制が廃止となり、市町村制が適用されていく。そして昭和36（1961）年に笠利村から笠利町となる。現在は平成18（2006）年に名瀬市・住用村と合併して奄美市となることが決定されている。

## 2. 集落の境界

文化年間の『大島私考』の「間切ノ事」に次のような記述がある。

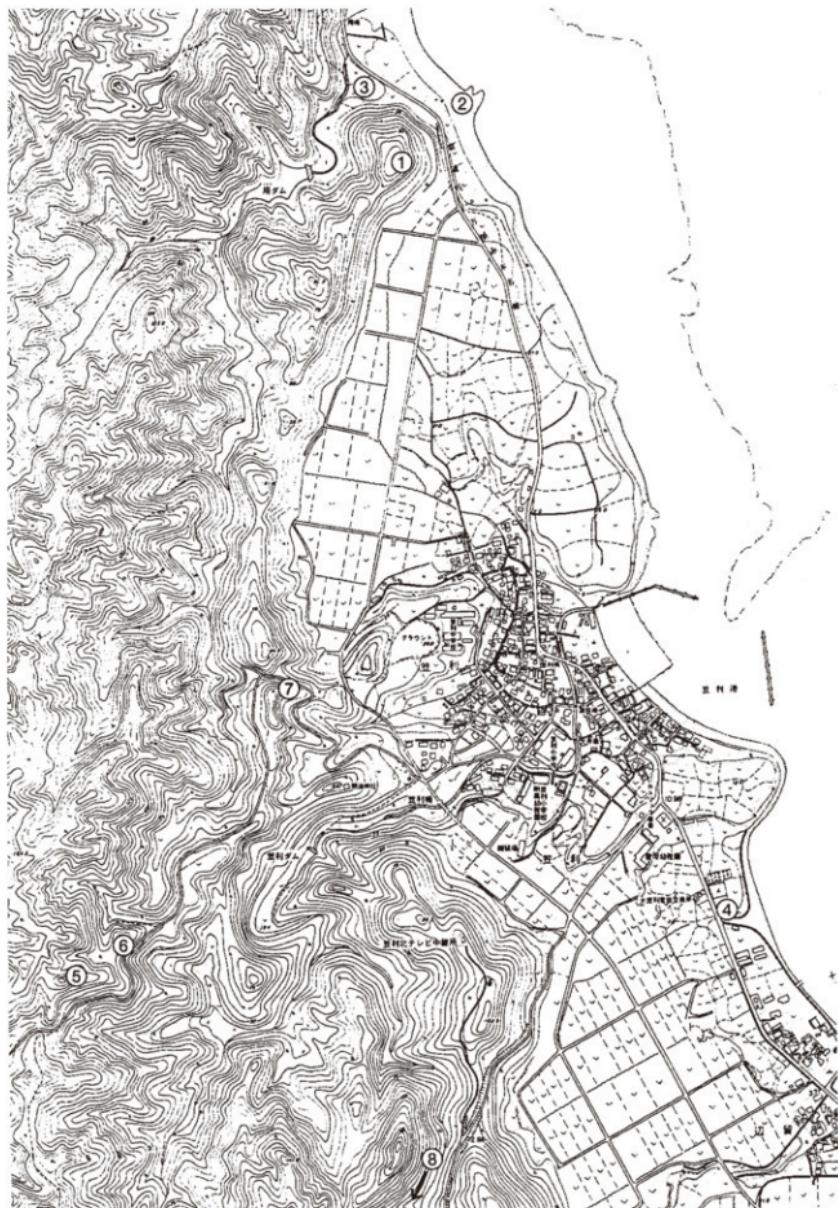
—略— 間切ノ内ニ村アリ —略— 岡嶽山野ヲモテ境ヲ分ル事ナク只其人居ノアル所田畠支配スル地ヲモテ何間切ト究全体地面ノ境ナシ村々モ亦然リ人家ヲ何村ト呼ヘリ —略—<sup>(76)</sup>

集落の区分は、「岡嶽山野」を境界とせずに、人家とその耕作地のまとまりを村としたとある。しかし現在の境界を見る限り、その山や岬や川などの地形的特徴をひとつ目の印としていることが多い。だからと言つて現存の境界が近代以降に新たに決められたものとも言い切れない。

北に位置する用集落との境界は、海岸へと握り拳を寄き出すようにある円錐形をした形の整った①タバチ／高鉢山と浜辺の②タチガン／立神とを結ぶ所と言う。ウーパル台地の外縁を下った所となり、ケンムンやミンキラワード（耳切れ豚）の出没が語られる怖い場所でもある。古のなかには、タバチ山背後を流れる③アラホウを境とすると語る者もいる。ホウは川の古い発音である。確かにアラホウ上流や川沿いの山斜面は笠利集落の字となっている。またタバチ山の呼称も大島各地に見出せる呼称で、古くは固有の名称があったと思われる。アラホウに臨む山も斜面に字グシクダ／城田とあるその突端になる位置やその整った山容が空間を特徴付けるありようからも、グスクであった可能性を拭い切れない。

南の辺留集落との境界のありようは複雑である。海へ迫り出す辺留グスクのある辺留崎の台地は、字図で辺留となっている。つまり字図では台地の笠利側の裾が境界となるのだが、人びとの語る境界は、辺留側海岸に入った④トヨミネゴラと呼ぶ川となっている。「昔、トヨミネという爺さんが水捌けをするために造ったから、その人の名前をとって付けた」川の名前だと語られる。この周辺もガラッパやケンムンの出没が語られ、鬱蒼として恐れられていた所だったと言う。

治水をしたトヨミネという人物には、『嬉姓喜志統親方系譜』に載る「豊嶽」<sup>(77)</sup>が相当するか。七代宇宿與人の次男家筋の人物である。寛文10（1670）年の誕生で、母親は「天華峯本喜世姫女」即ち手花部の喜瀬村の



役（村長）の娘である。喜界島湾與人であった父の病死でその職を継ぎ、その後大島の東間切與人・喜世與人・実久與人を歴任し、47歳で隠居を願い出ている。孫の代となる明和4（1767）年に「豈」の字を遠慮するべく国元から指示され、「都瓊嶺」とする。この孫と曾孫とがこの名を名乗っている。寛延元（1748）年生まれの曾孫は田地與人を務めており、役職からもこの人物による治水工事がなされたことも考えられる。

集落南北の境界がこのように基本的に川を境界とした。では山側の境界はどうであろうか。通例は山を雨水が流れ下るミズサガリつまり尾根が境界とされるが、手前に低い山が重なる笠利は大部山側に入り込む形になる。

居住空間中央のハンニエ／赤嶺台地背後の山道が、西海岸側へと横断して川上集落へと結ぶ。その付近を境界とした。赤嶺の人は川上側の谷間に棚田を造った。そして笠利への山道には⑥ウフヨホイ⑦シャヤヨホイと名付けられた見晴らしの良い休憩場所があった。尾根伝いに入った所には⑤フウマツとかイシノと呼ばれる場所がある。ここは出征などで島を出る時、名瀬からの船が沖を北行するのを見送るために火を焚いた所だという。一族が弁当持参でやって来て火を焚いて別れを惜しだ事が、昭和14・5（1939・40）年の支那事変の頃まで行われていたと語られた。

もうひとつの山道は、前述の『元禄国絵図』や『嘉永絵図』にも描かれた赤木名への山道である。「壱里武者三町」とは6.8キロ程になるか。この山道には途中で須野からのスノケンワレ（ワレ／切り通し）や辺留からのブルケンワレの道が結び、用岬の海の難所を避けた東西両海岸を結ぶ幹線道路を機能してきた。境界となるのは⑧ムイノスンと呼ばれ、字城泉川／グスクイジュンゴとの関連も考えられる。近くにあるアミゴと呼んだ湧水が往来する人びとの呑み水として利用された。禊の場所を意味するアミゴの呼称とともに、ケンムンの曲没が語られたりする「ちょっと物騒な所」と意識されていた。

こうして境界となる空間にはかってケンムンやガラッパ・ミニキラワードの出没が語られ、人びとが境界の向こうに異界を想ったことが思い起こされた。またフウマツは島を出でいく人たちの海原の彼方へと繋がる人びとの思考を伝えるように語られていた。

### 3. 「笠利村大字笠利總絵図面」を読む

『大島代官記』に明治15（1882）年の記述がある。

大島郡地租改正十一年十二月ヲ本年十一月迄ニテ、地價定五月各自ヘ地券証渡ル<sup>(6)</sup>

明治6（1873）年の地租改正が、その5年後から奄美でも始まり、5年の歳月を要したことが分かる。この時作製されたのが、この総絵図面である。シマ方言の呼称に漢字を当てるなどしたため、その表記にはこじつけも見受けられる。そこで各小字のシマユムタでの確認を試みたが、漢字読みの呼称に慣れ親しんできたために曖昧なものもありあった。それらは後頁に一覧する。ここでは笠利集落を特徴付ける小字名の幾つかを書き出してみる。

第一に小字数が71と、用村の34字や辺留村の19字に比べて明らかに多いことである、それだけ広大な空間即ち耕作地を擁していることが分かる。前述した辺留の字となる辺留城／ベルグスクと辺留崖／ベルクブは、辺留海岸の海浜側となり、その背後は笠利字が入り込んでくる。こうした入組みようは、古く辺留と笠利がひとつのまとまりを持った空間であったことを考えさせてくれる。

そして何より字図を見て際立つのは、グスク呼称の字名が多いことである。普通一集落に一字名を見出すかどうかというグスク名が、ここでは六小字で確認できる。

一富城／トミグスク、一〇金久城／カネクグスク、一八高城／タッグスク、一九城泉川／グスクイジュンゴ、四一山城／ヤマグスク、五十城田／グシクダの六字である。



更に三十四小田／オダが古くムエングスク／前城と呼ばれていた。この場所はハンニエ／赤嶺台地の東側の一画となり、この台地それ自体がグスクと考えられている。また前述の蔵があったと考えられるオグラの場所を含む。六八小浜／クバマ、六九立道／タチミチそして三の三金久／ミガネクにまたがる隆起珊瑚台地の一画からはグスク遺構の一部が発掘され、ウーバルグスクの呼称が現在与えられている。

これらグスク字は幾つかのまとまりをもっているように見える。ひとつは辺留グスクを挟んだ富グスクと金久グスクそしてその延長上にある高グスク・グスクイジュンゴのまとまりである。そして赤嶺台地を含むムエングスクと背後に位置する山グスクの広がりがある。またグシク田と前述の高鉢山となる六一立神／タチガンとを繋いで海岸に迫り出した低い山並である。これらのまとまりは、琉球支配下での蔵元をその要の位置にして三方から囲むように配される恰好になる。だが赤嶺台地や蔵元の位置となる空間は、1571年の尚元王の笠利討ちと結び付くと考えられる。他方辺留グスクを中心とする広がりは尚真王に遡る笠利討ちを含む、それ以前の大島討ちや喜界島討伐とも関わると想われる。つまり辺留グスクを中心としながら、前頁で辿ってきた歴史的絆縛とともに他のグスクが整備されてきたことも考えられるのだ。

このように見てくると、海に迫り出した辺留崎に辺留グスク、そしてその辺留崎と結ぶ台地に金久グスク、更にその背後の山には高グスクが位置し、これらを一連なりの構造として捉えることも可能だろう。では海岸砂丘として広がり、現在の金久地区の居住空間となる笠利集落の小字一となる富城／トミグスクは、どのように解釈できる呼称なのだろうか。

沖縄の那覇港を一望する位置にある豊見城／ティミグスクのティミが、「響む／トヨム」(鳴り森く)に由来するとも語られることも、「おもうさうし」に「辺留笠利」と謳われた地であれば、ひとつの解釈の参考になるだろう。だがこの「富」にはもう少し歴史的な背景を描いて考えてみることが必要となる。

ひとつの糸口として、喜界島志戸橋に伝わる辞令書を参考に挙げてみる。

しよりの御み事

き、やのしとおけまぎりの

大ぐすくの大やこは

ぢゃくにとみ〔が〕ひきの

一人さわのおきてに

たまわり申候

しよりよりさわのおき〔て〕の方へまいる

嘉靖三十三年八月廿九日 (註)

志戸橋間切の大城の大屋子職は、謝国富引所属の一員さわ（地名）の姓に賜り候と、尚清王代1554年に出された辞令書である。この「ぢゃくにとみがひき／謝国富引」とは、十二支の日を三番に分け、各番を三勢頭座に分けて政務を分担させた官衙のひとつである。巳日番のひとつに謝国富勢頭座があり、この勢頭座を古くは「引」といった。この「ひき制度」は尚真王代には出来上がっていたようであるが、王府の官制としてどのような展開を遂げたのかは未だ不明な点が多い。だが、この「九引」の名称が「おもうさうし」に謳われる貿易船の名称としてあることが指摘されている。(註) つまりこの語尾につく「富」が船の義に解すべきもので、「とよみ」の縮まった形だとされる。また各「引」の長官「勢頭」が船頭を意味し、軍隊を指揮したことも指摘されている。

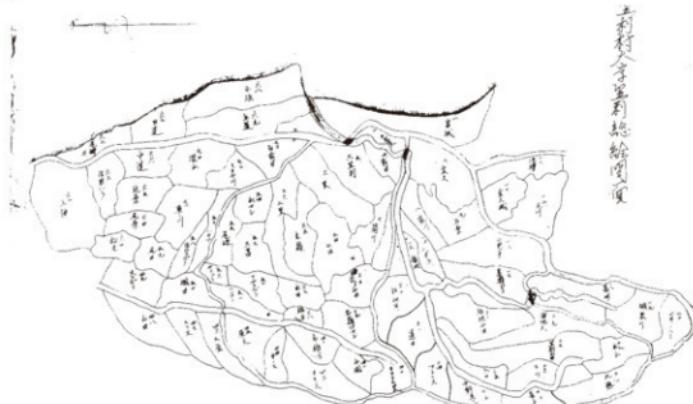
少し整理すれば、古琉球（薩摩支配以前）の独自な組織であった「引」は、不明な部分も多いが、軍事的・交易体制的・行政的体制を有して編成されたと推定されている。軍事としては船を意味する「富」ごとに海軍隊をなし、長官である勢頭の下に筑登之、更に家来赤頭（下級役人）が10人程従った編成となったと考えられ

る。この海船隊の軍士たちが、後の首里城の城門を守備する武官「勢頭部」にもなっていったと思われる。<sup>(40)</sup>

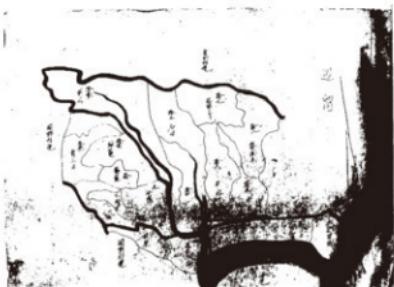
因みに、こうした理解とともに改めて喜界島の辞令書を読めば、単なる官職の補任だけではなく、軍事力をともなう統治者の配置であったとも解せよう。尚徳王代の喜界島討伐で在地の長を島長にしたことは前述したが、第二尚王朝に入つてその支配を確固なものにしたことが浮かび上がることになる。

このように小字名富城／トミグスクの富には、軍事力をともなう船の意味を考えることができた。繰り返された笠利討ちを考えれば、この意味は十分理解できる。またグスクと結びつくことも、次のような聞き取り事例を聞くことで新たな一面を窺えよう。ひとつは大島宇検村の宇検集落で、グスクを集落中央のハマジョグチ周辺の呼称としていた。またひとつは加計呂麻島の西阿室集落で、グスクを船着場の呼称としていた。古く海岸砂丘で内海を形成した金久から対岸の里へとグスクから舟を漕いで通ったことが古老の伝承に語られたのである。この船着場としてのグスクの役割と富にみる意味背景を考え合わせると、海岸に沿う砂丘を小字名でトミグスク／富城と呼称する意味を理解することが可能になってこないか。辺留グスクに隣り合う位置でのこのような富グスクの存在は、グスクとしての展開とともに、「おもろさうし」に「辺留笠利」と並称された背景をも導くように考えさせるものがある。

ここではグスク字についての言及にとどめ、以下に「笠利村大字笠利総絵図面」と小字呼称の一覧を提示する。



笠利村大字笠利総絵図面



辺留絵図面

大字笠利の小字記録とシマユムタ呼称

字番号	記録された字名	シマユムタの呼称	別称・その他
1	富城	トゥミグスク	
2	金久	カネク	
3	三金久	ミガネク	
4	前田	ムエーダ	ムエダ
5	大笠利	フウガサン	
6	里	サト	
7	筒川	ツイヅイゴ	
8	泉川	イジュンゴ	
9	石原	イシハラ	
10	金久城	カネエグスク	
11	池増	イケマシ	
12	又川	マタゴ	
13	前平	ムエンヒラ	
14	大井原	フィバル	
15	前ニハル	(ムエニハル)	小字団 前イニハル・前嶺とも
16	福地	フクヂ	
17	喜瀬ジラ	キイシジラ	小字団 赤瀬ジラ
18	高城	タッグスク	
19	城泉川	グスクイジュンゴ	
20	モ井ノスミ	ムイヌスン	小字団 モイノソミ・モイノスミとも
21	大迫	ウフザク	
22	長子	ナガネ	小字団 長禄
23	中野長子	ナアヌナガネ	小字団 中ノ永禄
24	アトニ又	アアトゥト	小字団 アトト又 別称 アトン又
25	入口	?	
26	三川	ミキヨ	
27	笠利山田	カサンヤマダ	
28	永山	ナガヤマ	
29	溜池又	タモキマタ	
30	福地山田	フクジヤマダ	
31	迫田	サクダ	小字団 作田
32	福地平	フクジビラ	
33	前山田	ムエヤマダ	ムエンヤマ
34	小田	オダ	ムエングスク
35	赤嶺	ハンニエ	
36	上里	ウツザト	
37	永田	ナガタ	小字団 長田
38	稻方	ウツニイホ	小字団 上稻方

39	赤嶺コマシ	ハンニエクマシ	小字図 赤嶺小増
40	キヨラモ里	キヨラモリ	
41	山城	ヤマグスク	
42	赤稻方	ナアニイホ	小字図 中稻方
43	タキノ又	タチマタ	小字図 タキ又
44	中ノ又	ナアマタ	
45	屋ン又	ヤンマタ	小字図 屋仁又
46	又釜	(マタガマ)	小字図 又金
47	スリ又		小字図 増理又
48	山田	(ヤマダ)	
49	大クビリ	フックビリ	
50	城田	グシクダ	グシュクダ
51	フンコン	フンコシ	
52	アヤクヅリ	アヤクビリ	アラクズレ
53	大富	フウドゥン	
54	永マシ	ナガマシ	小字図 永増
55	尾崎	ウサキ	
56	ヤンクビリ		小字図 屋仁クビリ
57	ハサマ		
58	佐仁クビリ	サンクビリ	
59	尻田	セレダ	シェレダ 小字図 シリ田
60	松元	マツモト	
61	立神	タチガン	
62	尾崎浜	ウウバ	小字図 尾濱
63	住用ハンタ	(スンミュウハンタ)	小字図 住用半田
64	尻原	セレバール	シリバル 小字図 セリバル
65	辻原	チヂハル	
66	中道	ナアミチ	
67	用道	ユウミチ	
68	小浜	クバマ	小字図 小濱
69	立道	タチミチ	ユラレンボ
70	深山	フカヤマ	アモレザク
71	屋川	ヤンゴ	小字図 屋仁川
72	ミチャ川	ミシャゴ	ミサガワ
73	白前田	シロムエダ	

#### 4. 居住空間区分の変遷

笠利集落は大笠利／フウガサンと通称されるように、その規模は大きい。そのため居住空間は1区／城前田・2区／里前・3区／金久に区分されている。しかし現在のありようにはひとつの全体としての笠利集落と記述することをためらわせるものがある。

年中行事のひとつ六月燈は、前日の夕暮れに秋葉神社での祈願が行われる。現在その準備は2年毎に各区が持ち廻りで行う。それぞれの地区からお参りに来た人びとは、境内でひとつの円陣を組み八月踊りを踊る。しかし当になると各地区的公民館広場で、それぞれ地区独自に趣向を凝らした余興などで一夜を楽しむばかりとなる。8月のアラシツなどの八月踊りも、地区毎に太鼓が打ち出され、家廻りの八月踊りはそれぞれの地区で踊られる。そして人びとの記憶はかっての賑わいを競うように語ったりもするのだった。

現在行われている行事などに接する限り、各地区的個別性が強く表現されて見えてくる。その反面、昭和22・3年にシマの人びとが出資して敷設した簡易水道を後年になって村が買い上げた時、その金を基金に「フイゴウラ（大井川）会」が設立され、5月行事のハマオレの舟競争の舟を新造した。地区全体の新たなハマオレ行事を行なうためであった。本来各地区に決まった浜辺へ下りての一重一醜による共食と、戦前の余興であつたマフ走ラセ（馬競争）が、新しい行事へと育てられてきた。そこには地区が互いに競いながらも、緩やかな一体感を楽しむ繋がりも感じられるのだった。

かつて行事が行われるたびに、金久と里との喧嘩や諍いが絶えなかったという。そこでシマの有志によるヨレ／寄り合いで、「文化的教養」としてのキリスト教の受け入れを決めたのだと思われる。明治36（1903）年のことだった。因みに37・8年で600人余のカトリック受洗者が出ていた程だった。注目すべきは、この当時笠利集落内を双分する里と金久であったにもかかわらず、地域間の葛藤や対立が行事などの折々に露出していたことが語られたことである。明治以降の変動が共同体のありようにも動搖を与えていたのか。笠利集落が受容してきた近代とは、一体どのように繋り広げられてきたのだろうか。

まず『嘉永絵図』に描かれた民家群を字図に照らし合わせてみよう。「金久」は富城／トミグスクと金久／カネクと新しい／ミィという意味を当字した三金久／ミガネクとの一部がそれに相当する。「里」はフイゴウラ／大井川の蛇行する前田／ムエダと大笠利／フウガサンの一部ということになるか。そして「赤峯」は上里／ウカザトが対応しよう。その結果絵図に描かれた「里」と字図の里／サトとの位置には少し齟齬があることになる。シマの人びとには、慶應年間生まれの赤嶺に暮らした老嫗の言葉が残されたように「ハンニエモトジマ、サトハヨリジマ」という表現が、シマの成り立ちとして伝承されている。伝承を裏付けるように、大井川の氾濫などによるサトの移動も考えられる。

改めて字名大笠利／フウガサンに注目してみると、ムエングスク／前城を小田／オダと改称したように、字名の変更が考えられてならない。その位置は字里を挟んで赤嶺台地の字上里に対応している。ウカ／上に対するシャア／下の関係から下里と捉える方が字名としては自然である。たとえば、後述する里を前と後に二分する時、後への編入を嫌った事が語られた。同様に上下の意味を嫌っての変更が考えられるのだった。また里を挟んでの前田／ムエダと白前田／シロムエダも、前／ムエと後の意味での尻／シリのシリムエダの方がその位置関係をより的確に表わす。だが尻に代わって白の字が宛てられ、それが城となって現在の城前田になったのではないかと考えられる。明治5年の学制に始まる郷校や尋常小学校に文字を学び、同時に文字の意味される力を知った人びとのひとつの表現であったということにもなる。

では大笠利という表現はどのような背景とともにあるのだろうか。そのひとつを人口動態のなかに読み出してみよう。

現在分かる範囲で明治43（1910）年と同44年の人口・戸数を掲げ、参考に戦後本土復帰後初の国勢調査とな

る昭和30（1955）年を描く。また比較として赤木名の三地区（里・中金久・外金久）を併せて提示してみる。

地区名		戸 数	男	女	合計	比
明治43	笠 利 村	2,119	6,509	6,581	13,090	
	笠 利	287	1,018	977	1,995	15%
	赤 木 名	288	728	844	1,612	12%
	里	66	195	201	396	
	中 金 久	110	257	302	599	
	外 金 久	112	276	341	617	
明治44	笠 利 村	2,147	6,616	6,752	13,368	
	笠 利	292	1,014	998	2,012	15%
	赤 木 名	295	742	883	1,625	12%
	里	69	194	212	406	
	中 金 久	12	289	308	597	
	外 金 久	114	259	363	622	
昭和30	笠 利 町	2,377	5,127	6,118	11,245	
	笠 利	299	563	735	1,298	11%
	1 区／城前田	70	125	172	297	
	2 区／里 前	142	277	372	649	
	3 区／金 久	87	161	191	352	
	赤 木 名	312	707	841	1,548	13%
	里	78	170	209	379	
	中 金 久	119	287	311	598	
	外 金 久	115	250	321	571	

笠利集落の人口が村全体の15%を占め、赤木名の三地区全体よりも多い。隣の龍郷村でもこの数字に及ぶ集落はない。つまり大島北域で最も人口の多い集落であった。

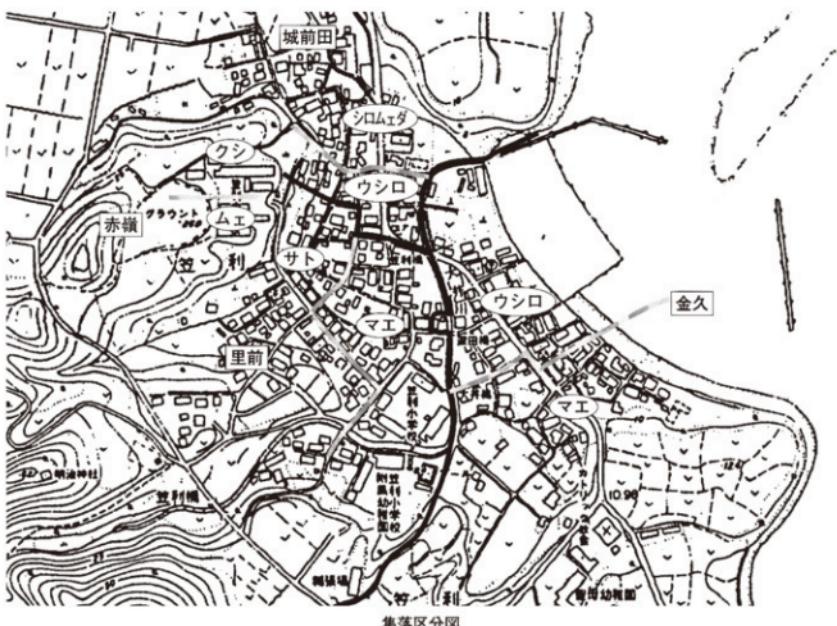
人口動態として女の人口に注目できる。明治43と44年で21人の増加を示す。ここに掲げなかったが、大正2（1913）年の女の人口は874人で逆に24人減少し、翌3年に942人と68人の増加に転じる。短期間での女の人口の増減の激しさは何に起因するのだろうか。

詳論を控えるが、明治18（1885）年頃から大島紬を製品として島外への移出が始まったことと関連しよう。10年後には需要の伸びに合わせ地機から現在の高機へと織機も改良された。紬事業者の増加と織子の急激な増員を考えられる。紬事業者の豪勢な暮らし振りは今も語り草である。また他地域ながら大島南城などからの織子としての奉公が語られている。つまり女子の増減とはこの織子奉公が考えられるのだ。しかも笠利には他シマにない広い耕作地もあり、人口増加を支えることができるだけの基盤はある。

このような背景が「大笠利」と表現させるシマの勢いとしてあったと言えそうだ。こうした人口の増大が集落の区分にも影響を及ぼすことになった。ここで昭和15（1940）年から終戦までを里前（現2区）の区長を務めたI翁（大正元年生）の記憶を中心に、集落区分の変遷を辿ってみることにする。

昭和15年当時、笠利集落は甲区と乙区に双分されていた。乙区が金久で、甲区が里前・城前田・赤嶺をひとつにまとめていた。そして昭和16・7年頃、甲区から城前田を分区して赤嶺を含んで通称ウシロと呼んだという。この時ウシロへの編入を嫌った網元の家がマエに入ったというのは既述の如くだ。また前述のウヤツコ

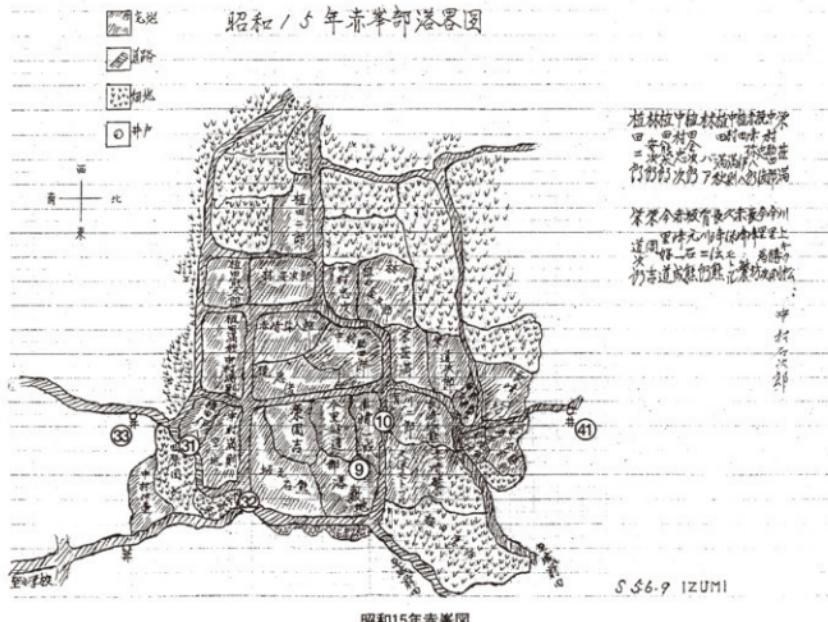
口と呼んだ台地下の一画は、字里でありながらウシロへ編入される。だが、分区しても猪甲区は大きすぎたため、サト常会とマエ常会に正式に二分され、区長補佐役のシティが常会長となりシティの呼称がなくなった。そしてこれが里前地区の呼称となつていった。



整理してみると、既に赤嶺台地裾の字里の下手となる大井川沿いをマエ、そして字白前田と字里の一部をウシロと呼び分け、甲区となる里地区が里を中心に便宜的に三分されていたことが窺える。そしてこのマエとウシロという地域区分は、現在の三地区のなかにも辿ることができる。

金久は現公民館傍の海からの道ナアミチを境とし、マエとウシロに分ける。マエの更に外れをアガレと呼ぶことから、古く民俗方位としてのアガレ／東とイリ／西との呼称区分がなされていたようだ。里は前述の如くマエとウシロが、それぞれ里前と城前田に区分された。分区した城前田地区内も更にウシロとシロムエダとに分けて呼ばれた。

ではハンニエ／赤嶺はどうであろうか。昭和15年当時をI翁が再現した地図がある。⑨カワイバ（会場）の建つ広場へ東西に走る⑩タチミチが通る。その南側をムエ／マエ、北側をクシ／ウシロとに呼び分けていた。現在の中学校グラウンドは畠地であり、更に背後の川上道を山越えた谷間斜面に棚田を作り稻作をしたことが語られた。台地上の赤嶺もひとつの共同体としてのまとまりを保持していた。昭和20年頃に赤嶺を中学校敷地として村に提供することが決まり、城前田側に2世帯、里前側に30世帯程が移住したという。しかし城前田が分区した昭和17年頃から徐々に転居は始まっていたといい、同23年頃まで続いたという。こうして赤嶺集落は姿を消すことになった。



前頁に紹介した「ハンニエモトジマ、サトハヨリジマ」を語ったという赤嶺の老嫗の目には、台地下の居住空間への入り込み者の増加やその激しい変容振りが映っていたことだろう。

## 5. 歴史的な空間と場所

笠利集落そしてその周辺でも遺跡の発掘調査が行われている。遺物の出土状況などその分析は『笠利町文化財報告書』に詳しい。既述した集落の境界近くでは、⑪辺留窪遺跡（1983調査）や⑫安良川遺跡（2003調査）が発掘されている。居住空間近くでは⑬ウーバルグスク遺跡（1998調査）があり、今回の⑭辺留グスク遺跡（2005調査）へと地道な発掘調査が持続されている。

### ⑬ ウーバルグスク遺跡

笠利集落を特徴付ける空間として、人びとがウーバル（上のハル／耕作地）と通称する隆起珊瑚の肥沃な台地が広がっていた。そこは1571年の尚元王の笠利討ちで功労のあった「久米島赤嶺・宇栄比屋」に「賞賜・大原地数畝」とある「大原」（フッバル）でもあったと考えられる。それを裏付けるように後にウーバルグスクと呼称される遺跡の一部が、隆起珊瑚台地から発掘された。そこは城前田地区から用集落へと伸びる県道がウーバルの台地へと上る斜面に沿っている。城前田の人びとはこの坂道をユラレンボ（ユラウとは集うの意味）と呼んでいる。夏の夕涼みに自ずと人びとが集まる場所から名付けられたものだという。隆起珊瑚の壁面となる道端の大きなアカギの木の傍の湧水は、ウーバル台地での野良仕事の呑み水として、また城前田の民家へと桶が用いられ呑み水にも利用され、今も涸れずに水が湧く。その台地の縁に臨む一画からは琉球石灰岩を

削った道とそこに敷かれた砂利の遺構が確認された。また出土物も12世紀中～後半と14世紀後半～15世紀中の新旧2タイプに分かれた青磁・白磁などが確認されている。しかもここからの出土物で瞠目するひとつに、約1センチ四方の骨製サイコロが奄美で初めて掘り出されたことだった。

沖縄島の勝連グスクや今帰仁グスクでもサイコロが出土している。ともに交易活動の拠点としても栄えた所であり、既述してきた歴史背景を重ねるとその関連が想われる。

日本では船の守護神である船靈としてサイコロはある。御神体として女の毛髪・男女一対の人形・銭12文とサイコロ2個などを、船中央の帆柱の下にはめ込み、航海守護を担むのである。交易の拠点として日本の海人たちの往来もそこにはあったろう。また1762年に琉球から潮平親雲上一行が薩摩へ行く途中遭難して、土佐国大島浦に漂着した時の談話記録『大島筆記』に次の一行が記されている。

「船上に日本の職原双六の通なる、琉球官職の双六を打て慰み居たりし由 —略—」<sup>(45)</sup>

航海の無聊を慰めるために、琉球役人は「職原双六」を遊んだことが窺えるのである。遣唐使の吉備真備が持ち帰ったともされる双六であった。「職原双六」がどのような遊びか分からぬが、古制双六は江戸時代の子供の絵双六と違って複雑な遊戯法であるからには、海上での無聊の慰みになったことだろう。

小さなサイコロの出現が、このウーバル台地に琉球や日本の航海者たちの訪れを想わせてくれる。前述したように蔵が立ち並んでいたと考えられるオゴラとは隣り合う位置に遺跡がある。そして石積みの石壘と想われる遺構はここまで築かれて伸びているのだった。

#### ⑯デンシャ

このウーバルグスク遺跡からオゴラに到る台地を形成する高さ6・7メートル程の隆起珊瑚の壁面に沿うその一帯を人びとはデンシャと呼んでいる。その謂れなどは全く伝わっていない。『琉球渡海日々記』に記述された「蔵本」となる琉球王府の役所があった所と推定される。役所の建物としての「殿舎」の所在地として、このデンシャという言葉だけが伝承されてきたと考えられる。更に海側へ少し行った珊瑚壁面の横穴式の窪地からは多くの人骨が出土した所もある。これについては別途後述する。

#### ⑰秋葉堂／秋葉神社

デンシャの珊瑚壁面に沿って更に海側へ出ると、城前田を流れるミシャゴ／三又川と大井川が合流した川口となる。その斜面を上った所に秋葉堂の祠があった。そして祠の向こうに広がる台地がオゴラと呼ばれた。丁度建ち並んでいたであろう蔵々の火伏せの神として祀られていたと考えができる。

その川口には金久の砂丘の先端が伸びている。人びとはそこから川を渡ってお参りしたという。満潮時には渡れなくなつて不便でもあるということで、昭和9（1934）年にオガン山へ明治神社となって移転された。また祠の祀られた下に広がる川口の砂浜では八月踊りや雨乞いをしたことが語られている。

金久の砂丘は字富城であった。そして沖縄島の豊見城では、『琉球国由来記』卷十二に大旱の時城内正面に龍王を安置して雨乞いをしたことが載る。<sup>(46)</sup> そしてここ富城に形成された砂丘の正面にあたる砂浜でも雨乞いが行われる場所ともなっていた。

『嘉永絵図』に「秋葉堂」とある祠が秋葉神社と呼ばれるようになったのは明治以降のことであろう。その社守を務めたのは、金久の新納実恒（安政6／1859生？～大正8／1919没享年60）で、疊葉を生業としていた。その妻貞千代（明治元／1868生～昭和13／1938没享年69）は実恒の没後、子供の病気回復を願って大正12（1923）年に金久で天理教の遙拝所を開き、現在の城前田の大笠利分教会となって現在に到る。その間社守の務めは新納の家筋及び姻戚が昭和52年まで続け、以後集落の管理となり、各区長が持ち廻りで務めている。

この実恒はクワサネジョ／子実恕と呼ばれた。父がウヤサネジョ／親実恕と呼ばれ、その家をシュータと呼んだ。藩政下で鳥役人を務めた家柄だった。本家はアガレにあり、⑰寺子屋をして手習いを教えていたと伝わ



る。ヒヤンゴの所でも触れることになる同家にまつわる伝承がある。それを実恒の娘（大正3年生）のM姫が語る。

「だんだんちゅんじややあ。夜中に声があつて、夜中、そこの主さんが海岸に行つたら、ムル、山程の宝物がね、色々あつたちゅうのが、或る亀さんを助けた恩ちい。それを聞いたですよ。」

宝物とは塗物の御膳や御椀などだった。亀を助けた報恩譚となって、同家の家財の由来が語られていたようだ。その新納家では、亀の肉は決して食べないようにと言われていたともいう。

またウヤサネジョも集落の人望を集めた人物であったようだ。明治9（1876）年に黒砂糖の勝手売買を求める陳上団が、12月25日に上鹿した。その2週間後の二陣のなかに新納実惣の名前を見出すことができる。<sup>(37)</sup> 年齢不詳とあるが、陳上団一行が西南戦の西郷軍に従軍させられたなか、新納他2名は免れている。長老の人として陳上に加わったものと推察されるのだった。

このように辿ってみると、秋葉神社は藩政下での扁舟人を務めた家筋が社守を務めてきたことが分かる。明治に入ってシマの世話役の存在として、社守を委せられたことも考えられる。

#### ⑧オゴラ

ウーバルグスク遺跡へと結ぶように石積み遺構があることは既述した。その石積みで台地を区画された所がオゴラ・ウグラと呼ばれている。年貢などを収藏した御蔵からきた呼称と考えられる。先のデンシャの呼称を考え合わせれば、前頁で紹介した琉球の「蔵元」として考えてみることが可能となる。

石積み遺構にあるオゴラへの出入口は、今よりも狭かったようだ。車の出入りなどでその出入口を広げたのだという。丁度石積みが外部との障壁を機能し、石壘として理解できるのではなかろうか。

このオゴラについて人びとは八月踊りの歌詞を援用して語る。

#### オゴラノ米ヤ

##### 枠トトカキノ音バカリ

金久に住む大正10年生まれの男性は、「大昔は殿様の倉庫があつて、米を枠に入れて山盛りの米を擱りきつて量る米の音は聞こえるけれど、自分たち庶民にはあたらない」という意味を、八月踊りで唄つたのだと説明する。薩摩藩政下でも、ここに年貢米を収藏する米倉が建っていたことをこの歌詞は教えることになる。

#### ⑨ニヤト／湊

現在の城前田公民館の裏手となる。以前は海が荒れた後に多くの魚が浜に打ち上げられ、手掴みができたものだという。昭和初期生まれの人びとはここに板付舟がつながっていた風景の記憶がある。字図では大井川を挟んで三金久／ミガネクの一画となり、砂浜が広がっていた。そこには湊であったことを教えるように、船の筋綱をつなぎとめる傘のような形をした岩があったという。その謂れが次のように語られる。

「笠利をカサンと言うのは、オグラが建つた所の川付近に、傘みたいな石があつたらしいことをウチは、（慶応年間生まれの母から）聞いたんですよ。上は大きくなつて、下がこんな小さい石。そこに船の筋綱引掛け、止めておつたから、傘と似ているから、カサ石、カサ石という謂れから、カサンという名前がついたらしいとウチは聞いている。」

その場所は既に埋め立てられており、浜辺の面影もない。そこから左手に草木に覆われたデンシャの岩壁を見て川口へと進むと、<sup>(38)</sup> マメヤと呼ぶ大きな琉球石灰岩が二つ並んだ岩室のような所である。牛を殺したりする所として利用されたり、竹で編んだ小屋が造られ病人が隔離されたりしたと語られ、余り近付くことがなかったという。その更に向こうには川口の一部を塞ぐように、一際大きな岩が立ちはだかる。<sup>(39)</sup> フウ石と呼び、昭和10年代の子供たちには、今は浅くなった川も岩から飛び込んだりできる深みとなっていたという。

この一帯の本格的な埋め立てによる波返しの護岸工事の時であろうか、『笠利町誌』に注目すべき記述があ

る。

「昭和三十九年大笠利の河川工事のとき岩底から出土したという壺が——略——鑑定では、タイ国産のシャム青磁であるということである。二つの耳についている双耳器で、高さ十二、胴まわり十八、口径六センチ五ミリある小壺で、タイ国名ではスワンカローレという。」<sup>(88)</sup>

ニヤト近くからシャム青磁が出土したのであった。この事実は何も唐突なことではなかった。『明実録』は1404年に、暹羅／シャムの船が中国福州に漂着を記し、それは琉球通好目的の航海であった。このことは『球陽』卷一の武寧王の記述に見出すことができる。<sup>(89)</sup> シャムの船は1388年に日本に姿を見せ、翌年朝鮮に向かう。1397年にも朝鮮に渡航している。<sup>(90)</sup> 琉球の外交文書『歷代宝案』には、1425～1570年のアユタヤとの貿易記録が残っている。更に15世紀初頭にはパレンバン・ジャワの船も日本や朝鮮に来航している。こうした東アジアの海域に東南アジアの船が帆走する。そしてそれらの船が、この大島の笠利を経て北へと進路をとったことも考えられるのであった。

川口に立って上流を見上げる位置に立つ。右手に秋葉神社跡と雨乞いの浜、フウ石の向こう側がデンシャの岩壁となる。対して左手は金久の砂丘の先が迫り出す。そこには②墓所とその向こうに大正4（1915）年に建設された③カトリック教会の跡地が位置する。教会はその後昭和11（1936）年、24（1949）年に二度の放火に遭い、26年に現在位置へと移っている。こうして川口の両岸のフウ石と金久の砂丘先端とによって形成される水道がニヤトへと導き入れるかたちになる。その向こう正面には赤嶺台地が位置し、ニヤトを見下ろす恰好となる。

59頁で字白前田を尻前田と解してみた。だがこの狭い水道のような地形にはシルとする地名がつくとの指摘がある。<sup>(91)</sup> 字ミガネクに隣り合う字白前田／シロムエダをこの指摘に従って、ニヤトへと導く水道に結ぶシルムエダと捉えることも可能とするような地形になっている。

明治初期生まれの祖父母たちが語ったこととして、赤嶺台地裾の④シンムラ近くに船を繋いでいたと言われ、そこがニヤトジリとなって波も寄せていたという。因みにムエングスクが旧名となる赤嶺台地東側の下に位置するシンムラとは、昭和初めのムエングスクからの土砂崩れで土が積もり、土地が徐々に上がってできたので名付けられた空間だという。考える以上に入海が赤嶺台地に沿ってかなり内側にまで入り込んでいたことになる。こうしてグスク遺構とされる赤嶺台地の眼下に位置した湊としてのニヤト、そして周辺に伝わるオゴラ・デンシャの呼称が、かつての入海とともに笠利の古層空間を浮かび上がらせてくれたのであった。

こうした入海を塞ぐように迫り出す金久の砂丘が海岸を形成する。砂丘上はアダン木・ユナ木が密生して防風林となっていた。家々の建て込みがそれらを切り開かせ、戦後メリケン松／木麻黄が植林されるが、台風による砂丘の侵食、倒木が続き護岸堤となる。そして昭和62年から現在の笠利港が整備されていく。

砂丘は辺留崎から伸びて、ニヤトジリとも呼ぶその先端に墓所を配していた。この場所が墓所となったのは、居住空間のどの位置からも等距離になるからだという。反対に辺留崎の方はアガレと呼んだ。そこには奉行所跡やシュータ即ち島役人の家が、寺子屋となってあったことは述べた。

#### ⑤奉行所跡

金久公民館傍のナアミチを挟んで、地区はマエとウシロに双分された。そしてマエは更に辺留崎の裾をアガレと呼んでいた。その一画をウントノチとも呼び、辺留崎の台地に沿うように珊瑚積みの石垣が続く。この場所が奉行所跡となる。

薩摩の琉球侵攻から4年、慶長18（1613）年に、笠利に「假屋」を設けて奉行の法元仁右衛門が赴任したと『大島代官記』は記す。<sup>(92)</sup> この「假屋」とは奉行が駐在する本仮屋と呼ぶ屋敷のことであり、奉行所跡とはこの仮屋のことをさしていると考えられる。しかも仮屋として徵用された家敷は、前掲した『喜志統親方系譜』

に連なる家筋であった。

家譜は世替りの結果を記している。「除首里大屋職為與人 令支配一間切 其時人躍降一統在役者準士」<sup>(33)</sup>と、大屋子職を廢して次位の與人に間切支配を任せた。「役職知行二十石役料十石下賜」とあるが、侵攻から15年後の元和9（1623）年の『大島置目之條々』では知行を召し上げ、切米五石にするとある。<sup>(34)</sup> 本格的な薩摩支配の始まりである。

『大島代官記』は同年から、「大親役被召挙、與人役ヨリ御勘定相逐候様被仰渡候」<sup>(35)</sup>とある。年貢勘定を與人がやるようにとのことだ。実務を引き継がせるため大親職はこの時まで存続していたのか。元和7年から同10年にかけての検地即ち元和十年竿による石高が確定され、「御蔵入」となって本府へ年貢を納めることが始まる。つまりこの元和10／寛永元（1624）年までの年貢は、琉球在番奉行へ届けられていたと考えられる。そして寛永10（1633）年に島制改革のために、有馬丹後守純定が来島する。これまで貢租の収支計算を島役人の大親・用人（與人）が上国して行ってきたことは不埒として改めることになる。年貢の取扱事務を現地で行えるように、奉行所から代官所へと機構改変を行った。『大島代官記』は寛永12年に「右御代、名瀬大熊村江假屋相直シ候」<sup>(36)</sup>とある。

このように辿ってみると、笠利集落に奉行所が置かれていた時期とは、支配する薩摩にとっても試行が繰り返された過程にあったと言える。年貢の搬送先が琉球在番から本府へ、そして取扱体制が代官所となって整った時、湊の機能はその交通路を琉球から薩摩への繋がりへと意味を変えることになる。そしてそれはそのまま、これまで機能していた笠利集落の海を介して広がった交通のひとつ終焉であった。

『大島置目之條々』には「かいせん作まき事」<sup>(37)</sup>という一条がある。「かいせん」とは琉球型の貿易船となる「船船」のことである。海上は薩摩の独占となり、「道の島」という呼称のなかに島々は閉じ込められていく。この「道の島」の道という言葉それ自体に、ただ手段としての役割だけが求められていたように、奄美の島々にとっては薩摩を下支えするための歴史が始まることになる。

## 6. 経験的な空間と場所

笠利集落でのノロとその祭祀に関する伝承を確認するのは殆ど困難となっている。その理由のひとつに、明治36（1903）年からのカトリックの受容がある。

たとえば金久にあったA家は、カトリックを受洗し聖職に就くことで、その家筋の流れを絶ち切ることが出来ると語っていたという。またA家当主の病弱であった長姉Bは、カトリック信徒でありながらノロを拌んでいたと語られた。毎朝一人手を合わせ、水を供え拌んでいた。また人の求めに応じ占いもしていたという。家筋の周辺ではこうした振舞いに文句を言う人もいたといわれる。また長兄Cも家の由緒を嫌って他所へ転居したと、その理由をCの孫が語った。

Bの孫が語ったノロとしての拌みと占いとは、ノロとユタとの混同がみられるが、ノロ祭祀が共同体祭祀からノロ繼承の家レベルへと後退していたことを示す。また、カトリック受洗後も続く病弱の困難が、ノロ家筋としての因縁をもぬぐうべくユタ拌みをしたことを窺わせる。Bが五十代で没したことなども、A家周辺の人びとに、聖職に就くことで家の繋りを切ることが出来るという想いを強める結果となっていることが、既に家を出ている孫たち（昭和33生・36生）によって語られたのである。

カトリックの笠利集落での受容は急激とも言えるものだった。大島への布教が明治24（1891）年に始まり、同30年には赤尾木から手花部・平へと布教活動は広がっている。笠利集落は海山ともに交通の便が悪く、他所に比べ布教は遅れていた。行事のたびに里と金久の小競り合いが繰り返され、赤嶺・里・金久の主だった人たちが、赤嶺のクワイバ（会場）に隣接した赤崎家で話し合った。その結果、ヒキ（血族集團）の親元／先祖元

が署名・捺印した嘆願書を作成し、神父に提出することになった。このことが神父来訪の時に、祖先元に合わせて殆どの分家筋も出席し、その数は300名を越えることになったという。それが明治36年のことで、翌年180余名が受洗、明くる年には434名という数に上る受洗者がであることになった。

この時既に本土でプロテスチントに入信した元巡査の下に新教信者もいたが広がりを見せらず、その後改宗したという。また他方には、秋葉神社の社守をした家筋のように、子供の病気回復を願って天理教を信仰し、大正12（1923）年から自宅を拝所とし、そこに病気回復を願う人びとが集った。

このように明治政府によって民俗宗教の排斥が言われるなか、明治4（1871）年のキリスト教に対する宗教政策の転換も相俟って、島外からの謂はば外来の文化のようにして入ってきた宗教が旧来の価値観に取って代わるように、集落の人びとの暮らしに浸透していく様子が明らかになってくる。そうしたなかにあって、オミヤさんと通称された秋葉神社も変容していくことになる。

祠下の浜辺では雨乞いや、八月踊りが行われたという。里にミヤア（広場）を見出せないのも、この砂浜がそれを機能していたことが考えられる。日露戦争の戦没者を慰靈するために明治43年から始まったという招魂祭も、現在は赤木名で行っているが、当初は各集落持ち廻りであった。その招魂祭もこの浜辺で行われ、相撲などをとったという。その後、里の<sup>⑥</sup>旧家の庭先に土俵が作られていたことが、大正4、5年の頃の記憶として語られた。同家の当主泉泰寿が、明治41年の島嶼町村制によった笠利区の区長を務めていたことと関連するか。同家をフウヤ（大きな家）と呼び、その場所自体をサト、金久の人などからはシマと呼ばれていた。当時はクワイバ（会場）がなかったから、家の敷地内に作ったのではないかと、昭和15年から20年の区長を務めた現当主は語っている。

一方秋葉神社は、月に二回程の参詣日があり、オサンセン（御賽錢）とともに祈願したこと、旧六月十七日の六月燈のことが語られた。川を渡って行く不便さ、また軍閥から、「ここはカトリック教が多いから、大きな目立つような神社にしなくてはいかん」ということで、ヒダリマンジロウなどが発起人となって昭和9（1934）年に廃社、翌10年に場所を移して新たに明治神社とした。

#### ⑦拝み山

明治神社が建立されたのがこの山頂である。御神体は明治天皇の毛髪であった。その後昭和46（1971）年に老朽化によって取り壊され、改めて大笠利の氏神を祀る秋葉神社となって現在に到る。

拝み山とは、オガニ山・オガ山とも呼ばれ、昔から神の山としてシマの人びとは認識していたと語られる。ノロ祭祀との関連が考えられるが、そのような伝承を聞くことはできなかった。しかし居住空間に臨むその位置は、十分にそのことを理解させる。字福地平／フクヂヒラに建つ神社の山裾は、現在集落の貯水場となっている。この機能も他集落のカミ山が水源地をその背後にもつことと同じだ。

#### ⑧ナンテン

拝み山と大井川を挟んだナンテンと呼ぶ山との間で、石合戦を想わせる興味深い伝承が語られていた。

「オガニ山と大井川を挟んで向かい合う山とで、昔、瓶の割ったやつの投げ合いをしたという噂を、昔の年寄りが語っていた。」

大正8年生れの男性が慶応年間生れの祖母が語ったこととして記憶していた。

瓶とはノロ祭祀に不可欠なミキ瓶の意味なのか。他地域からもカミ山と対峙する山との弓戦のことなどを聞くことがある。この伝承もそうした豪族の軍伝承としてあったのかもしれない。

ナンテン山はタガスクの山と尾根を並べひとつの山陵に見える。景観はベルグスク・カネクグスクの背後に、山城のように位置している。ナンテンとはナア／中のテヘ／嶽というナアテヘが転訛した呼称と推定されるが、どうだろうか。その背後は大井川の上流となり、<sup>⑨</sup>ミキヨと呼ばれ、先の『嘉永絵図』には「雜木林

ミキヨ山」と木々の絵が描き込まれた所に記述がある。川の右岸をサトミキヨ、左岸をカネクミキヨと呼び分けた集落の入会地であった。そこから更に上流が、字城泉川／グスクイジュンゴになる。

笠利村は砂糖焚きの燃料、開墾による濫伐などで荒れた禿山が殆どであった。そうしたなかに敢て「雜木林」と描き込まれた大井川上流とその周りのオガン山・ナンテン・タッグスクの山々からなる空間は、森と水と暮らしの生態系の知恵とともに歴史の古層を窺わせる。

ナンテンの伝承を語った話者は、「カミゴウラ」という言葉も同時に想い出したが、場所は分らないと語った。

#### ㊱ノロ女神のアミゴ

オガミ山の背後となる字追田／サクダ、即ち山間の田圃の奥にある泉が、「昔のノロの痕の泉であった」と語られた。だからそこから神社境内の手洗鉢へと、その水を引いているのだという。

更にサクダの奥に位置する山が字アトニ又で、アトウト・アトン又などという耳慣れない呼称となる。細長いソテツバテ／蘇鉄畠となっていると語られたが、立ち入ることはできなかった。

赤木名の字名にアッタント・アモタントというのがある。タントとは「担当」の意味で、按司担当／アッタントとシマノロを統括するアムシラレ担当／アモタントと解され、按司やノロ女神へ献納する水田のことを意味する古語と考えられている。このアトウト・アトン又もこの言葉を含む転訛が考えられる。

#### ㊲、㊳カミミチ

シマ守りのカミが歩く道、ノロ神女だけが歩くのを許される道として、シマジマにカミミチが通る。人びとの日常の立ち入りは禁じられ、道サレ／掃除も行き届いた空間として残されることが多い。だがここ笠利集落の里・金久からは聞き取ることができず、赤嶺台地でのみ確認することになった。

㊳のカミミチは赤嶺台地を上りきる所にある。その坂道をレンゲシャと呼んだという。そして台地上の里・金久を望む㊴ハナサキへと結ぶ。古くミヤア／広場と呼ばれたこの場所は、赤嶺の人たちが一番初めに八月踊りをするところであった。また台地裾のレンゲシャの坂道の手前には、㊵ウンコ・ムエゴと呼ぶ湧泉井がある。赤嶺の人たちの水汲み場として利用され、行事の時に作くるミキ（米粉を発酵させた呑み物）の水もこの泉の水を使ったと言われる。このように湧泉井・カミミチ・ミヤアという一連の場所の見せる広がりが、ノロの祭祀空間であったことを窺わせるようである。

㊴のカミミチは先のカミミチが赤嶺台地ではアガレに向う位置になるのに対して、赤嶺のクワイバ／会場が建っていた部落敷地の北側になる。現在中学校の校舎が建つ傍だと語られたが確認できない。台地斜面の木立のなかに古道らしきものを見出すが立ち入れない。

部落敷地とされたクワイバ／会場の建っていた広場は現在の中学校の校門になっている。そこから城前田側へと下りるウラミチが通る。カミミチはこの斜面の上ということになる。

かつて集会場の門口の下あたり、現況では先のウラミチを少し下った草叢の斜面が迫り出している所を、赤嶺に暮らした昭和初期生れの男たちは、「一寸物騒で、何も出るわけではなかったが、夜なんか歩くのが怖わかった」と異口同音に語るのだった。

その理由にはこんな背景がある。人が亡くなるとユタ神を頼んでマブリワアシ（死者の靈魂をグショウ／後生へ送るための口寄せ）をした。その吸物料理に使った卵の殻や、亡くなった人と同年の人がケガレを祓うために絞った左縄を捨てたのが、この場所であったという。この左縄とは、マブリワアシやお盆の時に、門口の左側に四・五十センチ四方を区切り、仏様の隠れ場所とされる空間を作る時に巡らせたものだという。

このように台地の突端にあたる場所が、死者と関わる場所としてあったことは興味深い。というのも、後述する古い墓所の幾つかはこうした台地の鼻先に位置したからである。しかもその傍にカミミチが通っていたの

である。

#### ㊱ウヤツコロ

これまでにも取り挙げてきた。先のウラミチを下りた所となる。と言っても他所よりは少し高い場所である。現在は城前田地区となるが、字は上里／ウサザトとなる。ウヤツコロつまり「親懐」のことである。親の懐に入っているように風の当たらない所で、台風がどこから来ても風は当たらないという。

概述したオモロの「命ふつくる」もこのツクロ／懐と解せよう。神や先祖に守護された場所という意味になるか。また「ハンニエモトジマ、サトハヨリジマ」という伝承をここに措くと、里の立ち始まりの場所とも考えられる適地でもあった。

#### ㊲ムエングスク

先のウンコからの坂道レンゲシャを右へ上ればカミミチからハナサキへ行く。そこを左に上ると、赤嶺台地の後ろ手の丘㊳コウエンへと結ぶ。学校敷地に沿う道に面した畠地をムエングスク／前城と言っていた。赤嶺台地がグスクとしてあった名残を示す旧名である。

このムエングスクに沿う道では、豚を殺した場所となった。海に接しない赤嶺では、正月料理のためのヴァ／豚ツブシを、旧十二月二十七日にここで行ったという。ここで殺してから海へ担いで行って洗ったのだという。

#### ㊴コウエン

この道を更に進むと中学校グラウンドの背後に、椀を伏せた形状の丘がある。グラウンドはかつて蘇鉄やダンクサでそれぞれマッカク（正四角形）に区切られた畠地となって広がっており、ここにもカミミチの断片が語られるが明瞭ではない。

コウエンの由来は、「昔、植田ゴンノスケという偉い人物が、昔のお金で十円で土地を買って、公園にでもしなさいということで、部落にくれた」からだという。この人物は熊本の学者で、赤嶺の居住空間最奥部に家を構えた植田二郎の親戚だったという。赤嶺出身で立身した一人でもあったのだろう。

このコウエンという呼称は、他所でも集落共有地に建てられた学校背後の山が、時にカミ山であったりする所が多く、一様にコウエンと呼ばれ、忠魂碑などが祀られる場所となって散見できるのだった。字義通り、公園として子供たちの遊び場となっているが、改めてこの場所とその空間を考える必要がある。

赤嶺のコウエンも頂上部は平坦な広場になっており、琉球松の大木が四・五本あったことが記憶されている。里の子供たちの遊び場として語られたが、カミミチの断片とともに、ここがノロの拝所であった可能性も考えられる。

このコウエンと呼ぶ山の背後は現在農道が通る。この切り通しの道もグスク背後によく見出される堀切りを利用して堀込んで出来た道のように見える。この一帯をボヤンブリとかボーヤブリとも呼んでいるが、その意味は分からぬ。そしてこの切り通しを上った向こうに、秋葉神社を祀るオガミ山や少し離れてはいるが字山城が位置するのだった。

さて、ここから再びムエングスクのヴァツブシの場所へと戻ろう。今は学校敷地となっているが、ここから赤嶺台地を横断する道が伸びていた。かつての会場からコウエンの方へと伸びる道をタチミチと言い、この道をヨコミチと呼んだ。そのヨコミチが居住空間を横切った所にひとつ道がある。先のウヤツコロから赤嶺の崖となった壁面を廻り込むように歩いて、中学校裏門へと結ぶ少し急な坂道がそれである。

#### ㊵サクンチビ

この坂道の名前だ。赤嶺に育った男性（昭和2年生）は、木々が鬱蒼として船ランプをつけて歩く程薄暗く、幅一メートル程の細く急な坂道だったと語った。彼はここはカミミチでもあったと言う。それより少し年配の

男性（大正13年生）は海やウーバルの畑へ行くにはこの道しかなかったと言う。確かに坂道を下りてウヤツツコロからニヤトヘと道は延びている。

この返道ではこんなことが行われていた。カミミチと言われた背景かもしれない。それはヒジャマオイ／火玉追いという。

冬になると赤いヒジャマという鳥がやって来て、子供を騙して火をつけて火事にすると言わされた。年寄りがヒジャマオイと言って、棒を持って「ヒジャマ、ホイホイ」と言いながら、太鼓やバケツを打ち鳴らしヒジャマ鳥を追った。

城前田の男性（昭和13年生）が想い出して語ってくれた。この年寄とは多分人びとが語った赤嶺にいたユタ神のことだろう。このヒジャマオイもユタが中心となって行った防災儀礼のひとつでもある。

この坂道の途中の平場を@フォンタと呼ぶ。崖の縁や高所の端となる眺望の良い所を言うハンタのことである。大島北域では余り聞くことのない地名が残っていた。その傍から台地斜面を下る@フウドンギヨミチは、往時の様子を想わせる木立の隧道となっている。

#### ④1 フウドンギヨ

フウドンギヨミチを下ると、フウドンギヨの湧泉がある。台地反対側の泉ウンコをムエゴ／前の泉と呼び、ここをウシロゴとも言った。夏場の湯水期にウンコの水が枯れると、ここへ水汲みに来たという。

字名に大富とあてられたフウドンとは、「大島規模帳」(享保13年／1728)で耕地開墾を規定する箇条にある「大糖」のことだろう。大きな沼地のこと、シマグチの調みでフウドウになる。これら箇条には、古荒地の復旧や新仕明(新地開墾)に一日飯米五合が支給される。大糖の仕明(干拓)には困難が多いので飯米七合五勺の支給が定められ、奨励されている。こうして干拓されたのがこの一帯であるだろう。人びとにウシロ田袋と呼ばれた常田となって広がり、ウシログ周辺は苗代田であったと語られている。

こうしてまずノロ祭祀に関わる事柄を尋ねながら、結果として赤嶺台地とその周辺を巡ることになった。しかもその伝承のありようは、赤嶺台地即ち字上里／ウサザトを中心として字里への広がりを想わせるような空



間となって浮かび上ってくるのであった。そして集落の拡大は更に下里／シャアサトに相当する字大笠利へと人びとが集まる展開となっていたと考えることができる。では、大井川を渡った海側となる金久はどうなのだろう。かろうじてひとつの断片的な記憶と出合うことができた。

金久の中心となる公民館の所をクワイバとか学舎と人びとは呼ぶ。その南側に通じる海岸からの道を⑫ナカミチ（ナミチ）と言い、県道に出てクランク状に更に大井川へと結ぶ。この道を区境にしてマエとウシロに双分することは既述した。公民館周辺の家をナミチヤア／中道の家と呼んだりするのも、ここが中心を機能してきたからだろう。

#### ⑬トネ屋敷／ノロ屋敷

「ウマヤトネ屋敷、ノロ屋敷アッタンドオ」と古老たちが教えたことを、金久の男性（大正十年生）が想い出して語った。語られたのはこれだけでしかない。その位置はハマジョグチ／浜門口からのナミチが結ぶ広場に臨んでいる。「トネ屋敷」というからにはノロ祭祀とも関わるトネヤに間違いない。そのありようは他地域のノロ祭祀空間と同様にあると言える。

ナミチをハマジョグチから海岸へ、旧三月三日のセック／節句に女子供たちは潮水に足をつけた。マッタブの子を産むからだという。また旧四月のムシアスピでは畠の虫を後向きに投げ捨て、その後はハマオレの一重一瓶での共食や馬競争を楽しんだと語られた。こうしてナミチは空間を双分し、かつて折々の行事のなかに時間を見分節するように登場していた。

トネヤとナミチと平行して通る道を挟んだ所がクワイバになる。八月踊りの打ち出しはここで始まる。今も変わらず一番初めに唄い踊られるのが、この唄だと言う。

#### 金久ナカミチニ 踊り組立テテ

##### ナカベ舞ユル鳥ヌ ヨドリ聴キユリ

「金久」は「美里／ミジャト」と唄われたりもする。金久の八月踊りは飛んでいる鳥も旋回して聴いているというシマ誉めの意味となる。そして今、行事に集う公民館に立ってみると、氏神となった秋葉神社の祀られた拝み山がジョグチからナミチの延長線上に位置して結ばれていることを、六月燈で点された提灯の明りが人びとへ教えるように闇の中に浮び上がっている。

\*

\*

ここでは調査の全体を紹介できないので、主にノロ祭祀とその周辺をめぐる人びとの限られた記憶や伝承を手掛りに、居住空間のなかに古層の空間を浮び上させるような点描を試みた。そしてもうひとつ、この笠利集落の空間を特徴付けているのは、幾つもの葬所跡が居住空間の外縁を沿うように点在していることである。他集落に比べて広い生活空間であることが、風葬跡やトフル／洞穴墓などの痕跡を擁することになったのか。次にそれらの跡を尋ねることで、居住空間から人びとの活動する生活空間へと範囲を広げ、そこに古層の空間を辿ることにしてみよう。

#### ⑭、⑮ヒヤンゴの墓所

金久のナミチがマエとウシロに地区を双分した。そのマエの更にアガレと呼ぶ居住空間を抜けて海沿いに行くと、辺留崎の裾に⑯墓所がある。この墓所と辺留崎の台地上にある⑰墓所を人びとはヒヤンゴと呼ぶ。

辺留崎は辺留グスクで通称される。現県道の通る道は、グスク遺構としての堀切からなったものだろう。教会との三叉路をイケダンハナ（ツイテタンハナとも）と呼び、両側からの木々がかぶさる狭いフカミチだったと、県道以前の様子が語られる。その台地の先端部分だけは、ヒヤンゴと呼び分けている。この台地に畠を所有する金久の長老（大正五年生）は、明治十年生の父から聞かされていたことがある。

「那覇の、沖縄の王様と西郷さんの薩摩の戦争が、向こうであったのだということを親父が言っていたが、親父も他の年寄りから聞いたらしい。」

辺留グスクで戦があったらしいと語られ、長老もそのことに頷く。「骨は太くて、この辺の人間の骨じゃないと、人が言っています」と、骨の形状を語る。畑から骨壺や骨が出てきて、肥料袋二十袋程でかたづけたことを語って聞かせた。

このヒヤンゴの一帯が墓所として利用されていた。里前の男性（大正元年生）は、「ニヤトジリの墓（現墓所）よりもヒヤンゴの墓は古い」と言う。「土が赤土だから、雨が降ったりしたら、納骨などできないように、人を埋めるために掘った穴に水が溜まって、水のなかに埋めるようなこともあったらしい」と語る。土葬そして洗骨のことを考えれば、ここは余り相応しいとは言えない。明治になっての墓所の設定を指導された結果のことなのだろうか。

台地上の墓所へは、棺を担いで海岸を行き、急峻な道を上るので、かなり危険だったという。下の墓所の背後に道の名残りがある。金久の男性（大正13年生）は、「昼でも怖い場所で、石が投げつけられたり、子供一人では近寄れない所だった」と話す。

昭和十年代に台地上から下への墓の移動が語られる。下の墓所には現在三家程の墓石を確認する。その後、昭和37年にできた<sup>66</sup>カトリック墓地やニヤトジリの<sup>67</sup>現墓所へと移されていった。このことから、古く墓所は金久がヒヤンゴに、里は各所の葬所からニヤトジリへということが考えられる。

台地上には、四基の箱式石棺墓と十二基程の東を背にした墓石が立つ。鹿児島から持ち運んだ山川石製の四基は磨減が激しい。加治木石製のはかろうじて碑銘が読める。「笠利町誌」に載る銘は、「仮屋藏方目付有馬十藏」「医学者有馬宗賢」「与人格新納実章」「新納弥兵衛」とある。<sup>68</sup>

有馬十藏の墓石正面右側は「弘化二年□□」と読める。1845年の干支「乙巳」となろう。中央は「玉」と不明五文字に統いて「心」とあり、戒名と見える。左側は「正月十八日」とある。「大島代官記」にこの有馬十藏を見出す。天保9（1838）年の御附役三人の一人である。代官記は「御死去 市後崎長左衛門殿」<sup>69</sup>と、代官同道の横目一人の死を記すが、どうだろう。後年になって有馬が墓石を建立したとも考えられる。因に、天保元年に黒砂糖の第二次惣御買入が始まり、その六年後に代官附役の一人藏方目付としての来島である。惣御買入の年に代官の移仮屋は大熊から名瀬の伊津部へと移っている。それがわざわざ笠利での建立とは、巡見の時に病気かハブ蛇に撃たれた故であろうか。墓石の右傍に三十センチ程の石仏が脇のように置かれている。

医学者有馬宗賢とは明治初期に笠利集落に活躍した人物のようだ。笠利村へのカトリック布教の中心人物であった中村長八神父が、村の委嘱で『笠利村教育史』（明治44・1911）をまとめている。そのなかに明治11（1878）年以前の寺子屋の師匠として、同8～12年頃まで、「世界国盡」「日本国盡」など社会の趨勢を説いたとある。<sup>70</sup> この「世界国盡」とは明治2年に福沢諭吉がまとめた本の事だ。明治5年の文部省布達「小学校教則概表」に地理教科書の一冊として、福沢の「西洋事情」とともに挙げられている。<sup>71</sup> 寺子屋ではあったが、遅く世界の地理と形勢を説く新しい世界観が学校や郷校すらなかった島でも辺境となるこの地で学ばれていたのであった。

与人格新納実章とは、前述した65頁の親サネジヨと関わろう。同家が寺子屋をしていたことが語られていた。恐らくシュータの屋敷が寺子屋として使用されたのである。しかも与人という役職も明治八年に廃されていく時代の変化とともにあ。

また日露戦争で戦死した若者の墓が建つ。明治32年に二十歳で徴兵され、同38年の奉天大会戦で負傷したのだろう。奉天占領の二日後に死亡している。因に笠利村での戦没者十五名、内奉天で三名が亡くなっている。墓石の碑銘が二十歳の徴兵で七年間を農民兵士として生きた明治の若者の姿を映し出す。

こうしてヒヤンゴに残る墓石が、幕末から明治へと生きたそれぞれに所縁をもった人物たちを語り伝える。しかもそこにはそれより古いと想われる箱式石棺墓もある。海に臨む台地という位置は、これら石棺墓にノロは土中に埋めないと伝わるノロ墓の可能性が考えられるのだった。こうして見えてくると、当初ヒヤンゴはそれなりの由緒を持つ人物たち或いは家筋の葬所であったのが、明治になってであろうか、墓所として広く使用されてきたことが推定されるのであった。

#### ◎現墓所

大井川が川口へと蛇行する沖積地と、金久の砂丘先端部から成る。その地形から砂丘による小丘を④ウーバカ／上墓、平地を⑤シャーバカ／下墓と呼び分けている。この区分は居住区分とは関係がないという。また小丘斜面からは崩れた箱式石棺墓を一基見出せる。この墓所がカトリック墓地とともに現在の墓所である。ここではシャーバカに立つ人びとがボウズ墓、スマウトリ墓、また龍郷墓とも呼んでいる、廃仏毀釈で首が落されたと想われる一対の石仏について言及しておく。

これには異なる解釈が施されている。一つは、奉行所跡の家筋に関わり、龍郷集落から持ち帰られたものだと語られる。一つは、前掲した『笠利氏家譜』に名を連ねる薩摩侵攻時の当主為転のものだという。<sup>(103)</sup> 同家は後に龍郷へ転居する。ともに龍郷と関係する。ここではもうひとつの解釈を提示して、後考に俟つことにする。

辺留集落との境界となるトヨミネゴラの川の名に由来する、『嬉姓喜志親方系譜』に載った豊嶽の記述に興味深い文言がある。<sup>(104)</sup>

寛文10（1670）年に生まれ、父の勤めた喜界島湾與人の跡を継いだことは既述した。宝永2（1705）年の御慶事上國後、喜世與人・實久與人など「其他諸間切交代」とある。続いて「依頼退役年四十七歳永隠居」とあるのは、生年から数えて享保2（1717）年のことになる。そして次の文言がくる。

「赤木名観音寺境内有石佛豊嶽形像世々子孫可崇敬」

この赤木名の観音寺は延宝3（1675）年の開山が、昭和46年に見出された石碑の碑文から考えられている。その境内に豊嶽の形像をした石仏があるから子々孫々崇敬すべしといふのである。しかしこれが墓でないことは法名とともにある次の文言が続くことで判断できる。

「墓所在赤木名春間」

墓所は赤木名の「春間」にあるとする。この「春間」とは赤木名外金久のシュンマのことである。現外金久公民館の場所がシュンマの墓所であったことを聴き取りで確認できた。すると墓石とは別に観音寺には豊嶽が自分の姿に似せた石仏を寄進したと読むことができる。ところが観音寺の墓石などは明治の廃仏毀釈でその殆どが打ち壊されている。その一部が背後の山道傍に今も放置されたままだ。その惨状を見兼ねた豊嶽の家筋の者が持ち運んだものと考えられるのだ。これを龍郷墓と呼ぶのも、龍郷集落背後に祀られている笠利氏後の田畠家由縁の仏像墓にも似る姿形から、後代それらとの関連が考えられたとも想える。宝永年間には奄美の島々の各地で、弁財天像の寄進が行われるという動向<sup>(105)</sup>がある。豊嶽の石仏寄進もその動きのひとつであると考えてみることもできる。

このニヤトジリの墓所よりも古く、各所に人骨が集積していたと語られる場所を聞くことになる。これから辿るのはそうした葬所跡である。そしてそれらの殆どが、ウーバル台地の隆起珊瑚の壁面に沿うようにある。ここで改めて墓所から大井川を渡った対岸のデンシャへと戻る。

#### ◎デンシャの横穴墓跡

前述したように隆起珊瑚の壁面が屏風のようにして続く。その一画に壁面の奥へと切れ込むように横穴状の窪みがあったという。今はその壁面を削り土砂も被ったので往時と様子は違っていると言う。そこには沢山の

人骨があったと言う。この一帯を所有し、川口付近の埋め立てをしていた昭和16年に68歳で没した（安政2／1855生れか）デンブッッシュこと本田浦範が、これらの人骨を整理して、ウーバル台地の海岸側のウティゴへ持つていて埋葬し直したことが語られる。だが、現在も土中から骨は出てくるという。

この葬所跡の印として、デンブッッシュによりトカラ列島中之島から持ち帰られた蒲葵の木が植えられ、今は大きく葉を茂らせている。何気なく語られるトカラの島々との繋がりは、この笠利集落の海の位置取りを語るものもある。

大正4年に聽写されたという、大島北城についてまとめた『年中行事聞書』の「十一月廿六日」に、次のように記された一文がある。

「七島正月トテ、平家が七島ニテ大島ヨリ一ヶ月先ガケタルヲ記念センガ為ニ今猶行フ、當笠利字ノミ行フ」(10)

この一ヶ月早く行う七島正月の聞き取りはできなかった。既に伝承も絶えてしまったのか。少なからずかつて行われたこの行事が、歴史に辿ってみた笠利の海上の広がりを想起させる。そしてそれを、今は一本の蒲葵の木が象徴するように、人びとがデンシャと呼ぶ空間に立っている。

#### ④ウティゴの風葬跡

ウーバル台地の海に臨む砂浜の一画に、隆起珊瑚の岩膚が剥き出しとなつた所がある。浜辺にも海食で幾つにも窪みをなした大きな珊瑚岩が露出している。その景観は独特の雰囲気を持っている。人びとはここが古くは風葬跡であったと語る。

デンシャの横穴墓の人骨を、デンブッッシュはこの崖の一画に埋葬した。その場所は今も確認できる。その傍の細道は台地上へと続いている。

台地上には昭和四十年代野菜の集荷場が造られ、そこへ送水するためのコンクリートの水槽が海岸に残されている。ウティゴの湧水は今もそのタンクから溢れ出ている。このウティゴに大正三年生れの老女が、「ハツトリの日」のミィディガミ／水神を拝むために、アザハ（スキ）とシギを持参して拝みに来たことを語っている。「女は水を使うから、必ず水神を拝めよ」と言う母に従つて、拝みに来たのだという。癸酉（ミズノトリ）の日柄で行われる健康貴いのアマミイズネのことである。こうした拝所は各所にあったと語られる。

またこの一帯の地下は鍾乳洞のように空洞になっているとも言われる。ウティゴの右側で畠仕事をしていると、空洞のような音が響き何かが埋まっていたという体験談が語られる。「平家の落武者が来て、向こうで最期を遂げたという話があったから」と、昭和15、6年の頃は、その当時の色々なものがあるんじやないかと話されていたものだという。

#### ⑤ミシャゴの横穴墓跡

マメヤの岩近くで大井川に合流するミシャゴ／三叉川は、城前田地区の居住空間背後を流れてくる。今そこは季煙とビニルハウスが広がるが、昭和四十年代までは水田であった。その低地から台地側へと斜面を上ると、隆起珊瑚の岩が露出した崖状の所に出る。その壁面に横穴式に深みをなす箇所が四、五ヶ所認められる。ここにも多くの人骨が納められていた。戦時中は防空壕代わりに使われ、それらの骨は外に持ち出されてかなり荒れた状態になっていたという。昭和三十年代にそれらの骨はセレダの洞穴墓に移されたという。

昭和三十年代前半に青年团に入った城前田の男性は、夜になってネセ・メラベ（青年男女）が浜で遊んでいると、度胸試しにここへ行くことを試されたという。周囲は田圃で家もなく、滅多に行く所でもなかつたから怖い所だったと、その当時を語ってくれた。

#### ⑥ウサキの墓跡

これまでのウーバル台地壁面ではない。その位置はウーバル台地と赤嶺台地に挟まれた所になる。昭和57年



の土地改良のための耕地整理によって、その地形は殆ど面影もない。階段状に整地された一部斜面に残された木立がその場所を教える僅かな手懸りとなるばかりだ。

字尾崎／ウサキとなるこの場所は、ウシロ田袋やミシャゴに広がる水田に迫り出す台地のようにあり、蘇鉄が生い茂り林になっていた。その内に墓があったという。道を挟むように三基と二基に分かれ、箱式石棺墓と墓石があった。城前田の男性（昭和13年生）は、小学生の時に鞘のついた刀が二、三振り置かれているのを見たと語る。ここにあった墓の骨は、天理教の司祭によってセレダへと移されたという。

この位置に立つと、右手の広がりを赤嶺台地によって遮られるが、ウーバル台地を正面にデンシャ・ニヤト・ニヤトジリの墓所が視界に入る。つまりここは集落への海からの出入口に向かっている。ウサキ／御崎となる呼称も、また台地上の石棺墓の存在も、ここがノロ神女の墓所であった可能性を窺わせる。ヒャンゴが金久の、そしてウサキが赤嶺・里のノロ墓跡とも想定される。だがこれ以上は人びとから消えた風景を想うばかりでしかない。

#### ◎セレダの洞穴墓跡

先のミシャゴの上流へ、ウーバル台地沿いにヤンゴ／屋ン川が流れてきて合流する。他シマでも見出せるこのヤンゴの呼称は、聖泉としてのカミの川と考えられる。先に語られた「カミゴウラ」との関連があるのだろうか。そのヤンゴの上流となる。宇尻田／セレダと呼ぶ。この地名を一説には潮の干満によって海水の入り込む塩入田を語源とするとの考察もある。しかし台地上に尻原／セレバルもあり、その位置からも居住空間背後にある田圃と解した方がいいかもしれない。

この洞穴墓は本来、③マチナゲと④モチカツという呼び分けがなされていた。そしてその由来を、安政2／1855年生れの祖母から聞いたという里前の男性（大正元生）が語って教えてくれた。そのままを紹介しよう。

兄弟二人で墓を造ることになり、こっちはモチカツという名前で、向こうはマチナゲという名前。

この名前がついたのは、右手の方の入口は、丁度兄弟で、ちょっと経済的に、昔の、良かったわけですね。人夫を頼んで墓所を造る時に、結局何人かの人夫が一生懸命にやった。一方兄貴の方は、非常に経済的に悪くして。したところが、兄貴の方から（人夫の）声が出て、

「あんたんとこは、お茶が出たか」ゆうて。お茶の時間にお茶が来たかゆうたら、

「もう一杯、モチカス」とゆうような意味ですな。兄貴の方（人夫）は、

「お前のとこは良いなあ、お茶が一杯出て。うちのとこはいくら待っても来ない」って。

で、マチナゲ。もう長らく待っても来ないもんだから、マチナゲ。

と、こうゆうような名前がついた。

一杯お茶を持って来た所は、もうキヨラ。死んでも、もう家は一杯、満杯になって、おかげやらお茶やら来る所のから、もう一杯だと。一方はいくら待っても来ないもんだから、もう、家なんか、何んにも、いまだになっても、マチナゲって来ないって。

こうゆう声がしたもんだから、結局、人間が死んだ時も、そのモチカツという所は一杯人間が入ったけれども、マチナゲでゆう所、人間が死んでも余り入らなかつちゅうですな。

謂われからすれば、言って良い言葉と悪い言葉があるとゆうような解釈もできるらしいですけれども。墓場を造くるのに、一杯なんでもかんでも持ち込まれておるんだと。墓場を造くる時に言った言葉が、結局人間が死んだ時も、そこに一杯、そこに入った。一方マチナゲとゆう所は、いつまでも待って来ないとゆう所は、もう人間が死んでも、そのなかに風葬する人はいなかつたらしい。けど、骨はいくらかあるけど…。

兄弟の墓造りで、その貧富の差故に、人夫たちへの茶菓のもてなしなど沢山持ち込まれるモチカツと待っても来ないマチナゲとが、人夫たちの話にのほる。墓が出来ると、その言葉通り墓に入る人の数も同じように

なった、という内容となる。墓の由来を語りながら、言って良い言葉と悪い言葉があるという教訓が含まれていたと話者は語った。

セレダの二つの墓は、まず向かって左側の隆起珊瑚の岩膚に造くられたのが⑩マチナゲとなる。伝承のように草叢に覆われて入口も隠れて分かりにくい。そこから十メートル程離れた木々の間に岩が重なるようにして二箇所に洞穴が並ぶ。入口はともに石積みで方形に整えられている、内を見ると砂が敷かれ、残された幾つかの骨片を見る。⑪モチカツの洞穴墓である。

戦時中は防空壕に利用され、シマが全焼した昭和20年3月の空襲の時にも避難したことを話者は語った。先に述べたようにミシャゴやウサキの墓の人骨もここに移されてきた。このセレダの墓は有名であったらしい。大正年間にも刀や壺などの骨董品を漁りに都会から色んな人間たちがやって来たという。現在ここに葬られていた人骨は、周辺の基盤整備の時にニヤトジリの墓所へ移された。しかしこの洞穴墓周辺の木立は残され、森山のようになって茂っている。

その前はセレダ／尻田というように、以前は水田が広がっていた。話者に名の由来を語った祖母は、小さい頃遺体を担いで墓へ行った光景を話し、この周辺は（死臭）臭くて通れなかったという。明治三十年代生れで百歳で亡くなったという姫が、自分なんか小さい時に、子守をしながら田圃道を歩いて、灯籠の灯をつけに行った体験を語っていたという。

このように遺体を納めた後、三日間灯籠を灯しに行くことを三日灯籠と言った。洞穴の入口は石積みで塞がれ、目の高き程の所から内が覗けるように、その積石だけ外せる覗き穴のようになっていたことを話者は語った。

これらの伝承から、セレダの洞穴墓は、明治末にかけても風葬として使われていたことが窺えるのであった。

これまでみてきたように、山の斜面や崖の中腹に横穴を掘ったり、洞穴を利用した葬所をトゥフル墓と呼び、笠利町の各所に見出すことができる。『南島雑話』にも「戸保呂之図」が描かれ、記述がある。

「トホロは以前は家は墓所々の家内に死人あれ□に入、穴の奥に棚の如く搭さくらま其上に置、三年目に骨洗とて、能焼酎にて骨を洗、壺に收め次第なしの□事、本琉球に同じ。今に古風残る諸間切あり。」<sup>(10)</sup>

遺体は洞穴奥の棚に安置され、三年後の洗骨で骨を甕に納め置くとある。同書別頁には更に詳しい記述がある。

「始死る者を穴蔵に入廻、是をトホロと云。今笠利間の宇宿村、又同間切手花部村にも有之。島中諸所にトホロあり。桶共に納め置く。三年忌に其骨を洗て、先祖の遺骨と一所にトホロの中に納め置く。トホロの奥の方南京焼の蓋ある壺、幾所にもなく并べ有是。又石櫃に納るもあり。むかしは島中なべて如此なりしを、今は大和の風にならひて土葬なり。今二、三ヶ村古法を伝へ、トホロに納るものあり。トホロ口は、戸を立て諭を下し嚴重也。」<sup>(10)</sup>

遺体は桶などに納め置き、洗骨後は壺や石櫃に収めて穴の奥に並べ置き、戸で閉したとある。そしてこの葬法が古法で、今は土葬になっているとある。この土葬についても、次のような記述がある。

「葬式大和に同。富貴なるものは人を雇て、多く紗綾、ちりめぬ〔縮緬〕等棺にまとひお〔被〕ふ。其入備相応に有之由。」<sup>(10)</sup>

貧富の差がそのまま葬法のありようにも反映してきたことが分かる。先の伝承の貧富を想わせるようでもある。他方で古法を伝える二、三ヶ村はトホロに納めているとある。そしてこのセレダの洞穴墓、即ちトゥフル墓は明治の末頃まで、この記述のように行われていただろうと考えられるのだった。

セレダの洞穴墓の前は、今黍畑が広がっている。そこにはウーバル台地と高鉢山へ結ぶ低い山並との間に

挟まれた低地となった所になる。この洞穴墓と向き合う低い山並みの向こう斜面は、㊷グシク田／字城田と呼ばれる。先に述べた字名に城／グスクを冠する一連の場所からは、ここだけが少し外れた位置にある。やはり改称されたと思える高鉢山が気に掛る山容ではある。グスクに関する考察でも、城塞化されたグスクとは別に、「古代に祖先たちの共同葬所（風葬所）だった場所ということがわかった」との指摘<sup>(10)</sup>もある。こうしたことを考え合わせて、改めてウーバル台地の古層のありようを想え、その地形は高鉢山の方からも入海となって海水が入り込んで、ウーバル台地全体がひとつ島のようにあった可能性が浮び上ってくる。しかも葬所跡が象るその台地にも古層の共同体の営みが考えられなくもない。そしてここにグスクの存在とどうにか十五世紀まで遡及し得た笠利の歴史がある。新たな思考を試みる準備が、一応ここに整えられたことになろうか。

\*

\*

さて、この稿を閉じる前に、もうひとつの場所を辿っておかねばならない。これまで人びとのグショウ／後生へと結ぶ葬所を尋ねてきた。そこで今度は人びとと異界とを結ぶ場所をみてみることにする。既に集落の境界にケンムンやガラッパ・ミンキラワの出没が語られていたことは紹介した。ここでは天界から降下するアモレオナグ／天降れ女、即ち天女の出没を語る場所などを指摘しておく。

#### ㊸アモレザ

先のウーバルグスク遺跡と用集落へ向かう県道とを挟んだ位置となる。五、六メートルの崖をなして切れ込む隆起珊瑚の間にある湧泉である。更にウーバル台地の壁面を沿え、ミシャゴの横穴墓跡が並ぶようにある。湧泉の傍には、幹が七セントチ程のツンギ（ホルトの木）の大木がそこを印付けるようある。城前田の居住空間から見ると深い竹林が丁度その場所を隠すようになる。字名は深山／フカヤマとなっている。

人びとはここで天女が、或いはアモレガが水浴びをする所だと語る。城前田の男性（大正11年生）の子供時代は、メーラベというきれいな娘が出ると言われ、怖がって一人では行ききらなかつたと言う。現在でも年配の女性に尋ねると、忌避の表情を浮かべる気配を感じる。これ以上の伝承などは聞き取れなかつた。アモレオナグが水浴びするとのみ語られるばかりだ。

笠利にはこのように、アモレオナグの泉とされる所がもう一ヶ所存在する。

#### ㊹アモレマタ／マタゴ

辺留グスクの台地を赤木名道が通る。字池増（シマユムタ呼称不明）の所になる。辺留集落側の崖下である。現在は谷などを整地して畑地へと変貌したが、かつてはアカギや雑木が茂り鬱蒼とした空間であった。ここも、昔天女が水浴びした所と、金久の古老（大正10年生）が教えた。

このように古く集落をサトとカネキにしたそれぞれに、アモレオナグの水浴み場が語られていたことになる。白衣／シルギンを身に着ける女性であるノロ或いはユタの禊の場所であったことも考えられる。ひとつはウーバル台地沿いに、ひとつは辺留グスクから金久グスクへと結ぶ台地沿いにあった。しかも居住空間にかなり接近した位置に存在している。この位置もカミゴトをする女たちの禊の場所であったことを頷かせる。しかし人びとはそれをアモレオナグ／天女として伝承してきた。そこにはカミに守護されるシマという意識があったようにも想える。

こうして天界からのアモレオナグの訪れが伝承されていた。その一方で海彼からの訪れも語り継がれている。

#### ㊻ウウバ

ウーバル台地の海側の砂浜である。先のウティゴで紹介した平家落武者の何かが埋まっていると語られた場所の前に広がる砂浜にもなる。砂浜はオグラの台地下から立神までの海岸を、タンバ・クバマ・ウティゴ・ウウバ・バシャンシャ・ソロバンヒラと名付けて呼び分けられる。そのひとつのウウバにまつわる伝承となる。

里前の男性（大正8年生）が語る。

「昔、向こうに、シナの女の人が遺体で、向こうに流れできたらしいですよ。その人を上げて、向こうに葬った所がある。だから、おばさんの意味のウバと語呂を合わせて、ウウバのバアと言って、死骸を向こうに葬ったからと言われている。」

風葬跡とも伝わるウティゴに近いこともあって、このような死体漂着の伝承が生成したのだろうか。この話は何人かの人たちが語っている。しかし、城前田の男性（昭和3年生）が、明治31年生れで百六歳で亡くなった母から聞いた話というのを語った。その場所はケンムンの出没が語られる<sup>◎</sup>ソロバンヒラの向こう用集落との境界となる立神の浜を舞台とする。しかも『大島代官記』は文化12（1815）年に用集落への来朝唐船漂着を記録<sup>■■</sup>しているのであった。

#### ◎タチガン

「海から、箱舟のようなものが流れてきて、その中に、きれーなベベを着た、衣装を着たお姫さんが、なんかおって、それをあれして、開けよった人が、大事に弔ってやったら、そのお爺ちゃんのところは、何なんかよなったちゅう、家が栄えたちゅう。」

大事にせにゃあかんちゅうて、流れ着いたものを、粗末にしたらいかんと…、（母が）言っておった。」

箱舟はヒツ（櫃）と言い、そのお爺さんにも名前があったが、忘れたと語った。この話しが語られたのは、「ヨリブック」と言って、災いを持ってくるヨリムン、寄りものとして、海から寄ってくるものを嫌い怖がる傾向があるが、母はこの話を大事にしなきゃいかんと話者に語って聞かせたのだという。

海岸の反対側となるアガレの浜でも、亀の報恩譚のようにして海からの贈り物が語られていた。笠利集落のそれぞれ両端の場所に、海彼からの果報の訪れが語られていたことになる。これらもまた笠利というシマをして出来事を表現する伝承として人びとが語り継いできたのだろうか。

このように人びとの暮らしとともにある空間や場所が、広く天空と海彼によって包み守られていることをこれらの伝承は語っているかのようである。それは歴史のなかに海を介して広げられた笠利のありようとともに、人びとが伝承のなかに生かし続けてきた世界でもあったに違いない。

## まとめに代えて

大島北城に位置するひとつのシマ（集落）が、「李朝実録」・「おもろそうし」そして琉球の史書のなかに登場してくる。そこにはまず、見逃す程の小さなシマが記録となって登場することへの何故があった。それはこれまでの理解では届かず見えなかった世界を考えるためのささやかな問い合わせといった。シマの人びとに聞き取りをしながら、繰り返しシマを歩いて人びとが語った場所に立つたびに、その問い合わせが重く大きなものとなった。だからこそその記録のひとつひとつに何故と問うことから、シマを歩きながら史料の読み直しという試みを始めた。

1450年の臥蛇島へ漂流した朝鮮人への対応が、そのひとつの糸口になった。「加沙里島」での甘隣伊伯也貴／笠利大屋子が琉球へ連れ帰る萬年と、三ヶ月後に完玉之／湾掟に銅錢で買い取られた丁禄の存在である。そこには琉球の支配下でありながら、笠利と琉球との対等とも言える交易関係が成立していた。しかも琉球に連れ帰られた丁禄は、改めて王府側の奴との交換となる。そこから見えてくるのは、王府と雖も介入できない地域間交易の権益であった。

では丁禄を買い取った湾掟／完玉之とはどこの人物なのか。『おもしろさうし』がその問い合わせに応えるようにある。卷十三は「辺留ぬ子」を謳い、それは「辺留笠利」のことと理解されてきた。だが他方に、卷十四、十五に謳われる「辺留のやせの子」があり、それらは沖縄の読谷山を謳うなかに登場する。そして湾掟の湾が読谷山間切の内にあった。そこからは読谷山に出自する者と辺留との関係が見えてくる。

しかも読谷山にある座喜見グスクを築城する護佐丸は、大島・喜界島の寄夫を使役しているのであった。また奄美の島々には勝連の阿摩和利の活動も考えられる。そして両者が共に滅びることになる。それは尚泰久王の時代であった。因に先の漂流朝鮮人の記述には、喜界島征討に国王の弟が軍を派遣していた。その弟こそが未來王子こと、後の尚泰久と考えられた。しかも大島・喜界島の権益を競った二人の滅亡後、尚泰久の側近である金丸が財政・外交を担う御物城御領側職に就くことになる。その後、1466年尚徳王による喜界島討伐によって、王府は泊地頭職を置く。ここに到って王府による地域間交易の権益をも含む島々の掌握が成った事が窺えるのだった。

こうした時代背景のなかに登場した笠利・辺留は、その位置がもつ日本や朝鮮への重要な拠点の役割を担った。それは逆に日本の側からの琉球や中国への拠点ともなった。その双方を自由に往来する倭寇などの海人や博多の商人たちにとっても、それは同様である。そうしたなかでたとえば琉球が喜界島を攻撃する一方で、その版図を臥蛇島まで広げることができたのも、大島北城を拠点とした人びとの活動があったからこそであろう。

尚徳王以後、琉球王府は三回の大島討伐を繰り返したと従来理解されてきた。だが「おもしろさうし」には、尚真王の笠利討ちを謳うオモロがあった。それを証明するように、「李朝実録」には日本甲兵が大島を奪うために戦闘を繰り返したこと記していた。そしてこれ以後の討伐も、年貢採取や滞納という謀叛が原因となっていた。このように繰り返される謀叛と討伐は、大島が琉球王府に組み込まれず、時に王府に抗する地域としてあったことを窺わせた。そしてそこには、鹿児島は大隅の波見に拠点を構えて活動した倭寇の頭領除海などとの連動も考えられたのである。除海没後敗残の倭寇が境界に至ると尚元王は出兵し、1571年王自らの笠利討伐では、その笠利村攻略で論功を受けた人物や在所の名前が、地名となって現在へと残されていた。つまり、王府による大島討伐が三回ではなく、少なくとも五回は行われた事が明らかになった。そしてこの三十八年後の1609年、今度は薩摩の琉球侵攻の前に、再びこの笠利は登場することになるのであった。

従来ある史料を新たに読み直すことで、より鮮明な十五・六世紀の大島の歴史が見えてこようとしている。

ここに描いてみた歴史像は、その最初の試みとしてある。

そしてこのような歴史を宿してきた笠利集落の空間や場所が、人びとにどのように語られてきたのかという聞き取りを以下にまとめてみた。それは人びとの暮らしのなかに、伝承や記憶とともに解釈されてきた時間の風景とでも言えるありようを探ることでもあった。

まず何処よりも多い呼称としてあるグスクを冠する小字名に注目した。そして歴史的な空間や場所を明らかにしてみた。既に薩摩支配下の奉行所跡は明らかであった。そして更に琉球支配下での役所跡と考えられる所が浮かび上がってきた。次に人びとの経験とともに語られる世界から、ノロ祭祀やその周辺のことなどを確認してみた。断片的な伝承ではあったが、尚元王に論功を与えられた人物の名を冠する赤嶺台地とその周辺のありようが点描されることになった。更にまた論功で与えられた大原となるウーバル台地からは、その台地を象るように蔵跡や遺跡の存在とともに古層の葬所の点在が明らかとなった。こうした全体のありようを、この土地に生まれ暮らしてきた人びとを介し、どのように空間に広がりが与えられ、場所に意味が付与され、組織立てられてきたのかを、たどり描いてみたつもりである。

總てが十分ではないことは確かだが、取り敢えずここには時間と空間と社会をひとつの全体とした笠利集落がまとめられている。この位置から更に見届けていかなければならない広がりが問われていくことになろう。まずはこれらがそのためのささやかな役割を担えれば、この報告に求められた目的の一端は果たせたことになるのだが、どうだろうか。

改めて、笠利集落の金久・里前・城前田三地区の皆さんの御声援に励まれ、御協力を頂けたことに感謝してこの稿を閉じることにする。

#### 引用・参考文献

- (1) 小葉田 淳 「李朝實錄 中世琉球史料」『南島』第二輯 1942 P11 (復刻 野嵩書院 1977)
- (2) 前掲書 (1) P11~P12
- (3) 前掲書 (1) P17
- (4) 伊波普猷他編 「中山世譜」「琉球史料叢書」第4巻 井上書房 1962 P73
- (5) 前掲書 (4) P74
- (6) 横山重編 「琉球神道記 弁蓮社袋中集」 角川書店 1970 P77
- (7) 名瀬市誌編纂委員会 「名瀬市誌」上巻 1983 P228~P229
- (8) 「おもろさうし」「日本思想大系」18 岩波書店 1972 P303~304
- (9) 前掲書 (8) P202~P203
- (10) 前掲書 (8) P314
- (11) 前掲書 (8) P314
- (12) 前掲書 (8) P350
- (13) 前掲書 (8) P314
- (14) 前掲書 (8) P370
- (15) 前掲書 (8) P370
- (16) 前掲書 (8) P370
- (17) 伊波普猷 「孤島苦の琉球史」「伊波普猷全集」卷2 平凡社 1974 P154
- (18) 『読谷村史』読谷村役場 1969 P25
- (19) 伊波普猷 「沖縄歴史物語」「伊波普猷全集」卷2 平凡社 1974 P382

- (20) 前掲書 (17) P154
- (21) 名嘉正八郎 「図説 沖縄の城」 那覇出版 1996 P66
- (22) 田島利三郎 「阿麻和利加那といえる名義」 沖縄青年会会報 1898  
伊波普猷 「阿麻和利考」「伊波普猷全集」卷1 平凡社 1974
- 仲原善忠 「中城動乱のオモロ」「仲原善忠集」中巻 沖縄タイムス社 1969
- 名嘉正八郎 「座喜味城と護佐丸」「琉球の城」 (株)アドバイザー 1993
- 伊波普猷 「琉球史上に於ける武力と魔術との考察」「伊波普猷全集」卷7 平凡社 1975
- (23) 東恩納寛淳 「南島風土記」 沖縄郷土文化研究会 1950 P380
- (24) 前掲書 (8) P368
- (25) 前掲書 (17) P135
- (26) 前掲書 (18) P292～296
- (27) 前掲書 (18) P210～215
- (28) 横山重他編 「琉球國由来記」 風土記社 1940 P74
- (29) 前掲書 (8) P289
- (30) 前掲書 (8) P34
- (31) 前掲書 (8) P322
- (32) 前掲書 (8) P376
- (33) 球陽研究会編 「球陽」(読み下し編) 角川書店 1974 P132
- (34) 前掲書 (8) P12～13
- (35) 松田清編 「古代中世奄美史料」 JCA 出版 1981 P101～102
- (36) 村井章介「十五～十七世紀の日琉関係と五山僧」金閥恕他編 「沖縄の歴史と文化」所収 吉川弘文館 1994 P193
- (37) 村井章介「十五～十七世紀の日琉関係と五山僧」永原慶二編 「中世の発見」所収 吉川弘文館 1993 P343
- (38) 前掲書 (4) P95～96
- (39) 伊波普猷他編 「琉球國中山世鑑」「琉球史料叢書」卷5 井上書房 1962 P67
- (40) 前掲書 (8) P324～325
- (41) 石上英一編 「奄美群島編年史料集稿」5『南日本文化』27号 鹿児島短期大学 南日本文化研究所 1994 P26
- (42) 亀井勝信編 「奄美大島諸家系譜集」 国書刊行会 1980 P171～172
- (43) 澄戸内町誌編纂委員会 「芝家史料」「澄戸内町誌史料編」4 2003 P32
- (44) 伊波普猷 「親雲上の語源」「伊波普猷全集」卷10 平凡社 1976 P180～185
- (45) 沖縄県教育委員会 「辞令書等古文書調査報告書」「沖縄県文化財調査報告書」第18集 1978 P115
- (46) 前掲書 (45) P118
- (47) 荒野泰典「日本型華夷秩序の形成」「日本の社会史」第1巻 岩波書房 1987 P185
- (48) 「第六章 海外の通交」「鹿児島縣誌」第1巻 鹿児島県 1939 P585～588  
高山郷土誌編纂委員会 「高山郷土誌」高山町 1997 P286
- (49) 徐葆光 「中山傳信錄」「那覇市史」資料編 第1巻3 那覇市役所 1977 P142
- (50) 高山郷土誌編纂委員会 「高山郷土誌」高山町 1997 P289

- (51) 畿 曙夢『大奄美史』 原書房 1975 P142
- (52) 前掲書 (4) P102
- (53) 前掲書 (33) (読み下し編) P169~170 (原文編) P204
- (54) 笠利町誌執筆委員会編『笠利町誌』大島郡笠利町 1973 P143~144
- (55) 前掲書 (42) P35~36
- (56) 石上英一「琉球の奄美諸島統治の諸段階」『歴史評論』603号 P 6
- (57) 山下文武編『笠利氏家譜—郷土研究資料その一一』『奄美郷土研究会報』2号 奄美郷土研究会 1960 P53~55
- (58) 石上英一編『奄美群島編年史料集稿』3『南日本文化』24号 鹿児島短期大学 南日本文化研究所 1991 P 9
- (59) 松下志朗『近世奄美的支配と社会』第一書房 1983 P27~28
- (60) 前掲書 (57) P54~55
- (61) 野見山温編『大島代官記』『道之島代官記集成』福岡大学研究所 1969 P77~78
- (62) 黒田安雄「藩政改革と対外的危機—汾陽文書の紹介」愛知学院大学紀要『人間文化』2号 1986
- (63) 比嘉春潮『新稿沖縄の歴史』三一書房 1970 P312
- (64) 野見山温編『徳之島前録帳』『道之島代官記集成』福岡大学研究所 1969 P279
- (65) 鹿児島県立図書館 所蔵
- (66) 沖縄県教育委員会文化課編『琉球国絵図史料集』第二集 榎樹社 1993 P28
- (67) 前掲書 (54) P152
- (68) 名越左源太『遠島日記』『日本庶民生活史料集成』第20巻 三一書房 1972 P483
- (69) 前掲書 (54) P90~92
- (70) 国分直一他校注『南島雑話』2 東洋文庫432 平凡社 1984 P141
- (71) 前掲書 (70) P151~152
- (72) 国分直一他校注『南島雑話』1 東洋文庫431 平凡社 1984 P202~203
- (73) 高橋一郎「道の島の源為朝—その言説の行方」福田晃先生占希記念論集刊行委員会編『伝承文化の展望』所収 三弥井書店 2003 P107~121
- (74) 鹿児島県立図書館 所蔵
- (75) 前掲書 (7) P283
- (76) 前掲書 (61) P 2
- (77) 前掲書 (61) P 7
- (78) 本田孫九郎「大島要文集」「奄美史料」1集 鹿児島県立図書館奄美分館 1971 P21
- (79) 本田孫九郎「大島私考」「奄美史料」2集 鹿児島県立図書館奄美分館 1972 P 4
- (80) 前掲書 (42) P41~42
- (81) 前掲書 (61) P96
- (82) 前掲書 (45) P116
- (83) 伊波普猷「古琉球の「ひき制度」について」『伊波普猷全集』卷9 平凡社 1975 P284~292 P320
- (84) 高良倉告「ヒキ「引」」・渡口真清「引の勢頭」沖縄大百科刊行委員会編『沖縄大百科事典』下巻 沖縄タイムス社 1983 P291~292
- (85) 『大島筆記』下巻 琉球史料研究会 1959 P16

- (86) 前掲書 (28) P267
- (87) 前掲書 (54) P247
- (88) 前掲書 (54) P84～85
- (89) 前掲書 (33) (読み下し編) P112
- (90) 高良倉吉 『琉球の時代』 筑摩書房 1980 P108～109
- (91) 仲松弥秀 「シルという地名」『うるま島の古層』 栄社 1993 P29～30
- (92) 前掲書 (61) P 1
- (93) 前掲書 (42) P35～36
- (94) 前掲書 (7) P283
- (95) 前掲書 (61) P 2
- (96) 前掲書 (61) P 3
- (97) 前掲書 (7) P283
- (98) 山田尚二編 『大島規模帳』『盛岡家文書』所収 1966 P10
- (99) 前掲書 (54) P404
- (100) 前掲書 (61) P68～69
- (101) 前掲書 (54) P333
- (102) 石川松太郎他編 『図録日本教育の源流』第一法規出版 1984 P149
- (103) 田畠勇弘 『笠利氏家譜』の解説』『奄美郷土研究会報』3号 奄美郷土研究会 1961 P37
- (104) 前掲書 (42) P41
- (105) 高橋一郎 「奄美・神の行方」「奄美学」刊行委員会編『奄美学 その地平と彼方』所収 南方新社 2005 P124～130
- (106) 野見山温編 『年中行事聞書』『道之島代官記集成』福岡大学研究所 1969 P428
- (107) 前掲書 (70) P42～43
- (108) 前掲書 (70) P139～140
- (109) 前掲書 (70) P140
- (110) 仲松弥秀 「神の居所」「神と村」 栄社 1990 P85
- (111) 前掲書 (61) P55



ウフヨホイから笠利集落を遠望



高城から里前・城前田・ウーバルを遠望



拝み山から里前・金久・辺留グスクを遠望



コウエン背後の山道からウーバル・高鉢山を遠望



金久公民館



里前の大笠利文化センター



城前田公民館



レンゲシャのカミミチへ結ぶ所からの拝み山  
(右) とナンテン (左)



拝み山の秋葉神社



サクダ（現委畠）の奥にノロ神女のアミゴ



ウンコ／ムエゴ。右はレンゲシャ



レンゲシャから右はカミミチ、左はムエングスクへ  
結ぶ道



赤嶺台地に建つ昭和二十三年頃の中学校



コウエンと呼ばれる山。右侧は中学校グラウンド



ウラミチを下りたウヤツクロ界隈



サクンチビ



フウドンギヨ／ウシロゴ、芭蕉の生えている所。中央木立の入り口がフウドンギヨミチ



辺留グスクから金久グスク・高グスクへと結ぶ赤木名道



辺留グスクから金久を望む。右側木立は奉行所跡



奉行所跡の石垣



フィゴウラ／大井川の川口。右側木立に秋葉堂跡、砂浜、フウ石



台風の高潮で増水した川口。右はフウ石



オゴラ。右端の木立に秋葉堂跡



オゴラを囲う石積の防壁



金久の海側から見る辺留グスク。その中央辺りがヒヤンゴ



ヒヤンゴの墓石



ヒヤンゴの箱式石棺墓



ニヤトジリの現墓所、ウー墓



シャー墓の一対の石仏と墓石



デンシャと植えられた蒲葵（左奥）



デンシャの横穴墓跡



ウティゴの風葬墓跡



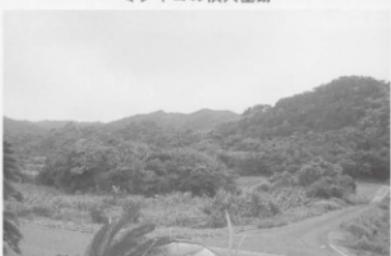
デンシャの人骨をデンパフシエが埋葬したウティゴ  
の崖



ミシャゴの横穴墓跡



ウサキの墓跡。中央の道を上った途中



セレダの洞穴墓跡。左手の大きな木立がモチカツ、  
右側の小さな木立はマチナゲ。背後の山向こうにグ  
シク田



モチカツの墓入り口



アモレザク



アモレマタは左側石垣下。その向こうに辺留窪と辺  
留グスク



ソロバンヒラから立神を望む。その向こうに用集落

## まとめ

辺留グスク調査は地形図の測量から舌状に伸びる台地とされており、1ラインから5ラインまでがグスクの西側端の部分に当たり、6ラインからはさらに西側にかなり伸びている可能性がある。現在の教会の敷地後方（西側）が狭まり、くびれていることから堀切の可能性があり、かなり大規模なグスクになる。遺構は北区に溝状造構、土壘、添郭などが確認され、南区においては虎口の可能性のある遺構がある。調査面積は広いがその大半は表土に近く畑の深耕、転地返しのショベルの爪あとであった。

遺構、遺物の出土状況と層位から辺留グスクは2時期と考えられる。初期の段階は虎口や溝状造構の石列の時期で玉縁口縁白磁、カムィヤキの12~13世紀と添郭や土壘を構築して現在見られる最終段階の時期が青磁、染付けなどから15世紀ごろが想定される。

辺留グスクにまつわる記述も沖縄の『おもろさうし』にみることができる。浦添の伊祖グスクと知念グスクには「あまみきよ」（奄美の人）が築城した立派なグスクであるようなことも書かれている。このような文献史学からの考察を取り入れた報告である高橋一郎の集落とグスクにまつわる民俗調査は、人々の生活の中に辺留グスクが生きており、より身近に感じられる。報告書では『李朝実録』などを新たに読み直し、高橋独自の論を展開している。さらに笠利地区の民俗調査を通してノロ祭祀から神社、墓所、水のみ場、暮らしと行事など、辺留グスクが地域の中でどのように位置付けられているのかを紹介している。辺留グスクの先端にある箱型石棺墓の場所は「ヒヤンゴ」と呼ばれる聖空間で笠利の金久地区の人々が墓所として利用し、伝承の残る場所と位置付けている。

こうした遺跡調査による具体的な事実報告と遺跡にまつわる地名、伝承などの民俗調査の視点からも歴史を読み取ることが出来る。

全体の総括は本報告で行う。（中山）

## おわりに

一般県道佐仁万屋赤木名線の改良工事に伴う辺留グスクの発掘調査は2年間行われた。調査は約200mが未調査のまま残り、この部分を調査して最終的報告書の作成になる。2年間の調査期間中台風、大雨、ハブの出没など調査に影響を与えるできごとが多くあった。調査は調査指導の先生方をはじめ地元の城前田区長山田和則さん、里前区長川上順市さん、金久区長は浜崎啓芳さんには公私ともどもお世話になりました。そして発掘調査を手伝っていただいた地元のみなさん、大島北高等学校郷土史サークルの皆さん、熊本大学考古学研究室、奄美文化財センターD E D E D Eの皆さん、大笠利カトリック教会などのご協力を頂きました。また大島支庁土木課は遺跡の現地説明会にあわせて道路工事の経緯と遺跡調査について住民の皆さんに説明をしていただきました。また整理作業を手伝っていただいた皆さんにはかなり無理な注文を聞いていただき感謝申し上げます。

ありがとうございました。

2006年3月10日